
サクラ散り

悠 椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラ散り

【Nコード】

N4849C

【作者名】

悠 椿

【あらすじ】

桜が散った。私立高校新聞部二年、橘谷龍に持ちかけられた相談。それは危険極まりない、“SOS”。そして橘谷は、天才と噂される新人生・来宮市松へと協力を頼むのだった。

第一章 出会いは偶然か

四月下旬。

「桜が散ったなあ」

新聞部の部室で一人呟いたのは、2年C組の橘谷龍。今月号の売り上げを集計しながら窓の外を見やった時、ふと気付いたのだった。最近売れ行きが最低だ。平和な桜陸高校に、トップを華々しく飾る様な事は起こらない。部の対戦成績、定期テストの学年順位発表、各種コンクールの結果通知。どれもこれも、真面目臭い、面白みの無い記事ばかりだ。きい、とパイプ椅子を軋ませてぐいと背中を反らし溜息を吐く。からり、と背後でドアが開く音がした。

「橘谷」

「なんですか」

「集計は済んだか」

入ってきたのは3年の部長、榮戸敬である。ガタイの良い体に似合わず、校則に忠実に則つり制服を着用している。人相は良い方では無い。しかし人当たりはよく、教師からの信用も篤い。榮戸は橘谷の前の集計用紙を取り上げると、ひとつ溜息を吐いた。

「駄目だな。来月号には力を入れないと」

「そうは言ってもですね部長」

「なんだ」

「こんな静かな高校、ネタも尽きましたよ」

「うつむ……」

榮戸は、集計用紙をもう一度橘谷の前に戻すと、顎に手を当てて唸った。ふつ、と橘谷が息を吐き出す。真面目そうな顔を悪そうに歪めて、集計用紙をそつと取り戻す。

「先生が浮気してるとか、生徒が援交してるとか。そんなゴシップでもなければ売れませんよ」

ファイルにとじるための穴をあけながら、至極真つ当な意見のように言う。実際は起こってはいけない事項である。榮戸もそれを素直に受け取ってしまう人間だから、素直に否定した。

「しかしだな。飽く迄これは生徒会会報として扱われてるし」

「そんなのは生徒会の広報に任せれば良いのですよ」
すっぱりとその言葉を切り捨てる。

此処私立桜陸高校^{サクラオカ}には、新聞部の他に生徒会広報という会報誌発行機関がある。が、現在では、新聞部が大体の情報を発信している為、広報と混同されている。しかし、元々新聞部は娯楽誌発行を目的とした部活である。

「ま、有り得ないですけどね」

軽く笑いながら自分の意見を一蹴し、立ち上がった。そのまま新聞部発足当時よりの新聞をフアイリングしたものをしまつてある棚に歩いていった。榮戸は眉間に皺を寄せ悩んでいる様子だ。

「二年程前迄は娯楽誌としての役割を果たしていましたよね」

ぱらぱらと集計用紙を挟むべき場所を探しながら、嘆くように、呟くように言った。

「ああ」

榮戸は苦い顔をして、応えた。

「内容も馬鹿馬鹿しい」

「そうだった」

「発行部数は今の5倍」

「俺は一年だったか」

遠い目をしながら榮戸は呟いた。二年の間に、新聞部は大所帯なだけとなってしまった。

その時また、がらりとドアが開く。顔を覗かせたのは部員ではない、見知らぬ女子生徒。

「ちよつと宜しいですか？」

張りのあるソプラノの声だった。きつい印象を受ける瞳に、色素の薄い髪は短いボブになっている。その女子生徒は橘谷と榮戸を交

互に見た後、困ったように眉根を寄せた。

「入って良いよ」

橘田にが声をかける。女性とは遠慮がちに体を部屋の中へ入れた。

「失礼します」

部屋に入ると後ろ手にドアを閉めた。桜陸高校の制服であるピーコックグリーンのワンピースに、これまた指定のボレロをきちんと着用している。しかし中に着ているシャツは指定の丸襟ではない角襟だった。左手で赤のリボンを弄っている。

「すみません。どなたが橘谷先輩ですか」

「あ、僕です」

「市ヶ谷先輩に話を聞いて来たんです」

リボンを弄っていた手を右手と体の前で組み、俯きながら女子生徒は言った。市ヶ谷先輩こと、市ヶ谷奏は橘谷と同じ、2年C組の生徒だ。橘谷は明るく優しい性格から、男女共に信頼を置かれている。その為、部活の下級生から相談事を持ち掛けられる事もしばしばある。しかし、市ヶ谷の紹介、という点で橘谷は不安を覚えた。ロクな事ではないだろう。市ヶ谷は放送部でアナウンサーを勤めている。昼休みの放送を担当しており、校内ではそこそこの有名だ。しかし放送部のトリックスターの異名を一年生の頃より拝命しており、信用に値するかどうか些か不安なのだ。からかい、といった類も考えられる。

「困った事があれば新聞部の龍君に良いたまえ、と語尾に星を飛ばしながら言われまして」

「は、はあ……」

「なので折り入ってご相談が」

そこで彼女は榮戸に視線を移した。榮戸はそれに気付き、橘谷を見、何も言わずにドアに歩いていく。橘谷が申し訳なさそうな視線を背に送る。

「俺は帰る。あまり遅くならないうちに帰れよ」

「はあ」

「申し訳ありません」

「じゃあな」

榮戸はそう言い残すと部屋を後にした。橘谷は所在無さげに女子生徒に背を向けると、先程座っていたパイプ椅子に再度腰掛けた。

「えっと。相談があるんだよね」

どう切り出していいか分からず、率直に聞くことにする。

「はい」

「でも僕で良いの？」

「もう頼る人が居ないんです」

女子生徒自身も手近な椅子を引き寄せ腰掛けた。きい、と音がした。女子生徒は居住まいを正すと、「すみません」と軽く礼をした。橘谷は苦笑とも微笑ともとれる中途半端な笑いをした。

「私、一年の天堤華和と申します」

女子生徒、天堤華和は挨拶も短かに本題に入った。癖なのか、リボンを右手でまた弄っている。

「友人の事なんです」

橘谷はなんだ、と思った。仰々しいと思って居たが、蓋を開ければこんなものだ。橘谷は何処か安堵していた。高校一年生の女子生徒の悩みなんて、恋だの勉強だの高が知れている。きっと喧嘩してしまつて仲直り出来ないとかなのだろう。こういった相談をいくつも聞かされている橘谷にとっては、少し拍子抜けであつた。

天堤は軽く息を吸い込んで、また吐き出す。そうしてそろりと口を開き、しつかりとした声で言つた。

「友人が殺されるかもしれないんです」

「へえ……っ、えっ？」

「ですから友人が……」

蓋を開ければ、これ以上ない危険な話である。拍子抜けしてゆるんでしまつていた神経が、再び緊張する。もう一度言おうとした天堤の言葉をふさぎ、了解の言葉で割り込んだ。

「あ、うん。解つた」

天堤は淡々と話を始めた。橘谷は心なしか、居心地の悪い気分だった。

「それは、三日前の事でした。私は友人である、小波未夏さんにとある相談を持ち掛けられたんです。その日は学校の間、なかなか会う事が出来ず、帰り道初めて会話した様なものでした。未夏はえらく落ち込んだ様子で、今にも泣き出しそうに顔を歪ませていました。私はどう声を掛けて良いか迷い、単刀直入に聞くしかありませんでした。

私が何の相談か尋ねると、未夏は意を決したような瞳を私に向けていったんです。私は誰かに殺される　と。“けいちゃん”という人間が関わっていることは判っているんです。

私は茫然自失でした。自分の身に起こった事のように、強いショックを受けたのです。最後まで未夏は泣いたり怯えたりすることはありませんでした。

その後、何を聞いても未夏は答えません。ただ沈んだ顔をしていました。

次の日、二日前ですね。その日、朝会うと打って変わっていつも通りの未夏でした。私は昨日の話は冗談だったのだろうか、と少し憤慨を覚えました。だって『殺される』って言われたのに、嘘でした冗談です、じゃあすみませんでしょう？

いえ、そんな事はどうでも良いのです。

私はなるべくその話題を避けて過ごしました。未夏もそうしてるのか、まったく話題には上る事は有りませんでした。私と未夏は一応、古典同好会に所属させていたのですが、訳有って活動はしておりません。ああ、未夏が病院に通ってたんです。私は付き添いで。顧問の多村先生も快く許可して下さいまして。

その為、二日前も一緒に帰宅しようとしていたんです。だけど未夏は、病院は一人で行くから同好会に出て、と言って帰ってしまいました。だから私は同好会にでましたよ。

そして昨日です。全く口をきかないんです。いえ、私だけではな

く、誰とも。昼休みには姿が見えませんでした。今までも当然いなくなることは多かったんですが。少し様子も変ですし……。やはり『殺される』の発言はあながち嘘ではなかったのか、とその時思いました。

前置きが長くなりました。あの、お願いです。未夏を助けて欲しいんです」

一拍の沈黙。そして急きたてるように天堤がもう一度繰り返す。

「お願いします」

「あ、う……はあ……」

橘谷は迷っていた。こういう事は警察に任せれば良いのではないだろうか。しかし、自分で助けると言っても、犯人を捕まえるにもそんな推理なんて出来ない。かといって四六時中引っ付いて守る事も不可能だ。

「そうだなあ……、警察とかは？」

「まだ真実と確定した訳ではございませんし、仮に嘘だった場合の対処が大変です」

「ああ、そうだね」

橘谷は天堤の意見を尊重することにした。

「天堤さん……だっけ」

「はい」

「僕なりに考えてみるから、明日にしようか。天堤さんは、一年何組？」

「D組です。放課後は同好会にいるかもしれません」

橘谷は放課後に何う事を告げ、天堤と別れた。天堤が部室から出て行った時、時計は一時間経った事を示す五時三十分を差していた。橘谷は窓の外を見ながら考えを巡らせていた。危険なことに噛みたくない事は確かだが、それ以前に全体像を掴めない。危険な話をどう収集つけようか、思い付かなかった。しかしすぐ、あることを思い付いた。

少し前に、部活の同級生から聞いた話だ。今年の新生に、だい

ぶ変わった人間が入学したらしい。大層な変わり者で、新設の同好会を立ち上げたと言いう話も別の人から聞いている。そして注目すべきは、変わりものと同時に“天才”であるということだ。真偽は定かではないが、入試は首席でパスし、中学時代にもなにやら大きな功績を残しているということだ。もしかしたら、この頭脳に頼ってみるのもいいかもしれない。

橘谷は引き出しを開けると一番上に置いてある今月号を取り出した。そしてB4を半分に折った形のその新聞を開き、さーっと通し読みして行く。

あつた。

橘谷はある箇所を目を止めた。

【危険物研究同好会】

けつたいな。と橘谷は笑った。危険物研究同好会とはいったいどんな同好会なのだろう。取材用のデータベース、分厚いファイルの一番新しいものを引っ張り出して来た。新設同好会詳細、と書かれている部分からページを開いて行く。危険物研究同好会は三つ目のページにあった。

危険物研究同好会

同好会設置申請者：来宮 市松

同好会責任顧問：熊倉 学教諭

副顧問：幹野 朔也教諭

活動内容：学校施設を使用した毒物等危険物の研究。

同好会会員名：4名

特記事項：申請者である来宮市松は危険物一種・二種免許を携帯している事を確認して居ます。

副顧問に入っているのは今年入っていた新任教師だ。扱いはあまり良くないのだろうか。特記事項の欄に書かれていることも気になる。危険物を取り扱う資格をこの歳で持っているのは明らかに世間

ずれしている。

（会いに行くか……）

桜陸高校は全生徒が午後八時まで残る事が出来る。現在五時四十五分。時間は沢山ある。

天才、ね。

橘谷はそんな事を考えながら、新聞部を後にした。

*

桜陸高校は広い。職員室、部室、放送室、保健室、事務室、図書館等があるA棟。理科室、家庭科室、調理室、視聴覚室等、特別教室の集まるB棟。B棟は最も広く、各教室には同面積の準備室・予備教室が標準で付き、教室によっては、研究室が付く。全学年十五クラスと予備教室、合計十八の教室が入っている唯一4階建てのC棟。この三つの棟が教室窓側を南向きに川の字に並んでいる。一番南側がA棟の教室窓側で、一番北側がC棟の廊下窓側となる。各棟二階と三階が渡り廊下になっており、それ以外でB棟に入る方法はない。逆に、A棟とC棟は昇降口があり、自由に出入り出来る。B棟は完全に封鎖する事が出来るが、ここ十年、その様な有事は起きていない。

危険物研究同好会は、B棟一階の一番暗い東側の角にある『化学実験室』で活動しているようだ。

化学実験室の前に立ち、一息ついた。新聞部から此処まで十分近く掛かってしまった。軽く躊躇してから扉に手を掛けた。すると背中にか当たった。まさか銃ではあるまい。と思いながら橘谷は首だけで後ろを向く。見えなかった。

「あ、あのー」

「御用は？」

「折り入ってご相談が」

橘谷は天堤の言葉をそっくり引用した。すると声の主は「ふうん」

と呟く。

「えっと……」

「危険物研究同好会に御用ですか？」

「多分」

「問題に答えて下さいますか」

「質問？」

「問題」

橘谷はいまいち理解しないまま頷いた。すると声の主は沈黙し問題を考えている。

すつ、と背中にあてられたものが外された。橘谷は振り向こうとも思ったが、なんだか怖いので止めておいた。

「では問題。日本に自生する有毒植物で、最も簡単に入手出来、心臓毒コンバラトキシンを含む物を一つ答えなさい」

「……………」

橘谷は自分の記憶を片っ端から引つ掻き回して居た。声の主の物であろう時計の音が響き渡る廊下。時間が三倍速で過ぎて行く。此処で橘谷は何か琴線に当たった。身近に手に入る植物など早々に限られている。しかも毒草と来ている。橘谷も普段から知っている訳ではないのだが、つい最近テレビドラマで見たフレーズを一気に思い出していた。謙虚な橘田にも、記憶力だけは誰よりあると密かに自負しているのだ。口に出したことは今までないのだが。そして思い出したのは、可憐な白い小花。

「スズランだろ」

「……正解です。動いて構いませんよ」

橘谷は安堵して、振り向いた。そこにいたのは橘谷より幾分低い身長に、長い髪を綺麗に切り揃えた女子生徒が立っていた。手には何も持っておらず、先程背中に当てられたものは分らない。橘谷は何かを言うでもなく女子生徒を見つめていた。見ない顔だったからだ。新聞部部員という立場上生徒全員の顔を覚えてるつもりだった。何故かこの女子生徒だけは見覚えが無かった。

「セクハラで訴えるぞ」

橘谷は急いで顔を逸らした。

*

「で、君は」

二人は部屋に入り、真ん中一番前のテーブルの席に橘谷が、一段高くなつた教壇に女子生徒が座つた。女子生徒は広い机に頬杖をついていた。心底つまらなそうな表情を浮かべ、橘谷を見下ろしている。橘谷は後輩であろう女子生徒にも拘らず緊張していた。女子生徒は横柄な態度である。橘谷は内心少しムツとしていた。

（先輩はこっちのハズなんだけど）

しかし、それを言っているには限が無い。

「二年の橘谷龍です。ここの部長さんの噂を聞きまして、協力を仰ごうと」

橘谷は軽くキツイ口調で言った。女子生徒は相変わらずつまらなそうにして、橘谷を見つめて居る。その間にも「うーん」とか「ふむ」とかぶつぶつ呟いて居る。

「噂ってなんだ」

「とんでもない“天才”だつてきいたんだ」

橘谷は頭をかきながら、軽い後悔を覚えながらいった。

「あの」

「キツタ二君」

「え？はいっ」

思わず返事をする。すると女子生徒はくすくすと喉を鳴らした。

橘谷は明らかに怪訝な顔をした。女子生徒は今だニヤけた顔の儘「失敬」と橘谷に視線を向けた。

「キツタ二君」

「君さ、一年だろう。少しは『先輩』とかさん付けとか出来ないのかなあ……」

「先輩、後輩なんて括りは所詮一年早く入学したかしらないかの違いだろう。日本の悪いところは歳のや経験の微かな差異でも上下関係をつけたがるところだ」

嘲笑とともに云う。そして彼女は付け足した。

「それにだな。私は十六、君も十六。私はちよつと前に誕生日を過ぎてるからな」

そうなれば彼女にうことも一理ある。僕は確かにまだ十六だ。まあ、春のうらかな日に産まれた風には見えないのだろう。

「わ、解った……のかな」

「ハッキリしろ」

「解ったよ！」

橘谷は唾が飛びそうな程大きな声で返事をした。女子生徒は、両の人差し指を耳に突っ込み「うるさい」としかめ面をした。橘谷は溜息を一つ吐くと、目の前の女子生徒に本題を告げた。

「協力ね……、また厄介な」

「じゃあ、結構です……。そもそも会いたいのには部長だし……」

「まあ、待て。その話、乗ろうじゃないか」

女子生徒はこれ以上無いであろう黒い笑みを浮かべ、橘谷を止めた。

「私の名前は来宮市松。この『危険物研究同好会』の部長だ」

これが橘谷龍と来宮市松のファーストコンタクト。

第二章 それは何故なのかと

話を始めた時、時計は六時を示していた。橘谷は目の前の来宮を見据え、事のあらましを説明し始めた。天堤の事、小波の事、序でに市ヶ谷の事。来宮は相槌をうちながら真剣に話を聞いている。

既に橘谷はこの危険物研究同好会に來た事を後悔してはいなかった。ただ矢張り間違った気もしていた。この来宮市松という人間は、他の人間とは全く違っている。橘谷はそう思った。橘谷は馬鹿では無いし、それなりに人並み以上の知識は有している。しかし、この来宮という少女はそれとも一線を画している。

「ふうん。君、可哀想にねえ。じゃあ犯人を突き止めるって事だろ」
「まあ、遠回しに」

「市ヶ谷という男は知っている。入学式の時、執拗に話掛けて来るので一発殴ってやった」

「あはは……」

（あの時の頬の腫れはそれか……）

来宮はずっと座っていた椅子から腰を上げ、橘谷の向いの席に座った。橘谷もしっかり向き合う様に座り直した。

「二つばかり質問していいか？」

「問題？」

「質問だ馬鹿」

「なっ……。あ、ああ。なんだよ」

橘谷は文句を言いそうになるのを抑え、橘谷に問い返した。来宮は人差し指と中指をたてた。

「一つ。天堤と小波の間にいざござは無かったか」

「僕には解らないな。触れられなかった」

来宮は中指を折り曲げる。

「じゃあ、二つ。全校で『ケイ』の付く人間の数は」

「教師も含めて？」

「全員」

橘谷は少し黙り込んだ。名前は全て頭に入っている。来宮は軽く顔を歪ませた。が、すぐに元に戻った。橘谷は気になったが、解った数を伝えた。

「二十四人。誤差は二人程度かな」

「そうか。じゃあ手掛かりにはならないな」

来宮はうーんと唸っていきなり机に突っ伏した。

橘谷は驚いて軽く後ろにのけ反る。その拍子、椅子からコケた。
「ったあ……」

思いきり尻餅を付いたため腰まで痺れている。橘谷は腰を擦りながら立ち上がり、椅子に座った。来宮はまだ机に突っ伏したままである。

「キツタ二君は馬鹿なのか」

「うっさいなっ」

「あー……。眠い」

橘谷は少し前の事を思い出した。あの妙な顔の歪み。あれは…
(欠伸だったのか…)

橘谷は思わぬ所で疑問が解決し、本日何度目かの拍子抜けをした。来宮はゆっくりと体を起こし伸びをした。

「そつえばキツタ二君」

「何」

「キツタニトオルとはどういう字を書くんだ？」

来宮は聞いたという答えを聞く気があるのかないのか、更に質問を付け足した。

「大吉の吉谷か？それとも契約の契谷か？」

「橘の橘谷。トオルは難しい方の龍」

「なるほど。それはまた…」

来宮は橘谷を凝視してニヤリと笑った。橘谷はその視線を遮るように掌を来宮に向けた。

「一寸、なんだよ」

「名前負けしてるなあ、と」

橘谷は「うるさいよ」と言っ外方を向いた。

「あー、拗ねてるー」

「拗ねてないっ」

橘谷は咳払いをして、無理矢理話を戻した。来宮は再度真剣な顔に戻り、解決策を模索し始めた。

「二十四人もいれば、その内数人は小波とやらに接触してるんじゃないか？」

「うーん……一年には数人しかいないからね。三年に一番多い名前だよ」

はあ、と二人揃って溜息を吐いた。

「橘谷君は頭良いんだろうけど」

「は？」

突如発した言葉に橘谷は情けない声を上げた。

「な、何をいきなり」

「でも、馬鹿なんだろうなあ……」

「はあ？」

再度意味不明な発言に橘谷は再度情けない声を上げた。来宮はくすくすと笑い、それから性格の悪そうなしたり顔になった。

「君はお人好しだ」

「悪かったね」

「まあ、最後まで協力しよう。乗りかかった船だ」

橘谷はこの限り無く漢らしい少女を、信用するか否か、全神経を使い悩んだ。

「私は信用するに値しないと言うのか？ ん？」

（よ、読まれた……っ？）

「いや、信用してるよ。うん」

来宮は「語尾にうんを付ける場合それは嘘であって……」などとぶつぶつ呟いている。橘谷は聞こえないふりをしてまた話を強引に戻した。

「この場合どうするのが得策なんだろう」

首をひねる。それを見て来宮が茶化すように言う。

「それをこれから考えるのだろう？」

「そうでした」

ため息ともつかない、少しの息を吐き出した。

「けいちゃん、か。これは明日、一緒に聞きに行こう」

「わかった。とにかくこれから何をすれば良いかを考えよう」

「今日は何故天堤嬢は独りで学校に居たんだ？今日も小波嬢は先に帰ったと言う事か？」

「まあ、そういう事だろうね。確か古典同好会に所属しているらしいし、今日も……」

「ふうむ。まだ校内にいるか」

「多分……」

「私は少し会って来ようかな。君と協力することも伝えなくてはいいけないし。君は同好会の資料と、出来たら二人の写真を用意してくれ」

「ふたり？」

「馬鹿。天堤と小波のだ」

橘谷は少しムツとしながらも、わかったと同意した。来宮は「うん」ともう一度背伸びをしてガタリと立ち上がった。来宮はボレロは着ていなかった。

此処桜陸高校の制服はなかなか人気がある。女子は、今時珍しい深いグリーンのAラインのワンピースに、丸襟のYシャツ、赤色のリボンタイ。そして、ワンピースと同色の胸丈のボレロを羽織る。人気を集めるのは、このボレロである。特に冬服は無く、冬場はボレロの代わりにチャコールグレーのセーターが支給されるのみだ。また男子は、チャコールグレーのブレザーに、女子制服と同色のニットのベスト、ブラックのスラックスである。こちらと同様に冬服は無く、長袖のニットが支給されるのみである。

しかし、ほとんどの生徒が、校則から大きく外れない程度に、自

己流で着用している。校則にも、支給品のみの着用を義務付けるが、節度ある生徒の自主性は認める、としている。要は、指定の制服ならどんな着方仕手も良いが、あまり派手過ぎは駄目。と言う事だ。

来宮もYシャツは角襟だった。女子も丸襟は嫌なのだろうか、と橘谷は思った。

「何を見ているんだ？さつさとしろ」

「来宮さんが綺麗だなあと思って」

「みえみえの嘘は止めた方がいいぞ。顔がひきつっている」

「あはははは」

橘谷の言った事は、あながちお世辞ではないのかもしれないが、この性格のせいで素直に綺麗だと思えないのが本心だった。来宮は率直な言い方をすれば綺麗だ。黙って俯いていれば人形のような雰囲気がある。やはり、性格の所為でくすんでしまうのだが。

「古典同好会はA棟の三階だったな。途中まで一緒に行こうか」

「え？あ、うん」

「不満か」

「そういう訳じゃ……」

不満も何も、比較的大歓迎ではあるが、どうも橘谷は来宮についていけない。男染みた言葉遣い、大胆な振る舞いに、行動の迅速さ。橘谷は来宮は実は男で女装しているのかとも思った。“市松”というすこぶる変わった名前からも、男女は判別出来ない。

（新聞部寄った時調べて見よう）

橘谷は一時保留として、心の片隅に追いやった。

「早くしろ、行くぞ」

「あ、ごめんなさい」

橘谷が急いで部屋を出ると、来宮は部屋に鍵を掛けた。再度橘谷に「行くぞ」と声を掛け、廊下を歩き出した。

橘谷が新聞部に着いた時、もう六時四十分になろうという所だった。春になり、日は長くなって来たにしても、外はすでに西日が沈む間際だ。ぱちりと蛍光灯のスイッチをいれると、幾度か点滅し明かりが点いた。蛍光灯の淡白い光と、外からさして来る薄紫の光が相俟って、不思議な感じだ。

橘谷は同好会を調べた際、出しっ放しにして居たデータファイルを開いた。パイプ椅子に腰掛けると、きいと軋む音がした。

【一学年生徒名簿】と書かれている頁で捲る手を止めた。橘谷が真っ先に調べたのは『古典同好会』ではなく『来宮市松の性別』であった。

（えつとA組……違う。B組……も違う。C組……あった）

縦に移動させていた指を横にずらしていく。此所には、『前年度学年末試験成績（順位）・所属倶楽部・生年月日・血液型・性別』が記載されている。学校側の作成した物で、新聞部が作成した訳ではない。生年月日は年齢記載の代りで、血液型は大怪我をした場合などの備えである。成績の欄は、一学年の場合、受験の際の成績となる。このような個人情報が入るのは一重も十重も二十重も、顧問である榎倉吾郎教諭のお蔭なのである。

（……えつと、来宮市松・500/500（1）・危険物研究同好会・90/04/08・O・女子……か……）

橘谷は矢張り来宮は女子だったと、何処か腑に落ちない気がしたが、反面途轍もなく安堵していた。女装だったらこの学校すら信じられなくなってしまう。

（それにしても、凄い成績だな）

因みに名簿に記載されている橘谷の欄は『橘谷龍・476/500（7）・新聞部・89/07/07・A・男子』と書かれている。上位十人の中に食い込んでも、決して上位五人に食い込む事が出来ないのだ。秀才になりきれなかった非凡才とでもいうのか。桜陸高校は名門校の中にも数えられている事から、来宮の優秀さが見るに明らかだ。満点で受験をパスしたのは彼女位ではなからうか。橘谷

はその時も7位であった。

（うーん。ま、いいか。古典同好会だったな）

気を取り直して、十八年度部活動同好会一覧・詳細と付箋の貼られた場所まで捲る。古典同好会は同好会で四つ目に記載されていた。

古典同好会

同好会会長：賀名 守

同好会責任顧問：多村 慧子教諭

副顧問：佐倉 吉宗教諭

活動内容：古典作品に触れ、古き良き日本の文化を知り、知識・教養を養っていくことを目標としている。

同好会会員名：9名

活動場所：A棟三階四号部室

特記事項：特に無し。

別段変わった同好会でもない。きちんとしている。会員数が十人に満たない為部活扱いされないのだろう。

（これはコピーして……と。後は顔写真か）

新聞部は二部屋に別れており、橘谷がいた部屋は、会議や記事を書く際に利用する部屋だ。もう一つの部屋は、学校の印刷室のコピー機を入れ替えした際、一台譲り受けたコピー機がある。その他は、一部屋目に入り切らなくなった資料や、簡易だが流し台と冷蔵庫があり、会議用の十人掛けのテーブルが置いてある。どちらの部屋も、普通の教室位の面積がある為、だいぶ広い。何故かと言えば、新聞部は校内でベスト3に入る大所帯なのだ。総部員数49名である。しかし、あまりにも部室に人の影が無いのは、全員が全員取材やら何やらと他の部活動に行ったり、ネタを拾いに奔走しているからである。

（僕はこれで良いのか……）

橘谷は軽く悩んだ末、何処か開き直す事に決めた。

隣りの部屋に行き、コピー機を起動させる。些か不安に為る様な低い起動音を立てた。すぐに起動し、ファイルから取り出したデータを予備も入れて三部コピーする。終わった後、オリジナルをファイルに戻しに行き、またコピー機のある部屋に戻って来る。顔写真があるとしたらこちらだ。

（流石に無いよなあ、顔写真）

一学年は入学したばかりなので、行事で撮影された物も無い。これはもう新聞部のテリトリーというより、写真部のテリトリーである。新聞部で使用する写真は全て写真部が提供してくれるのだった。とにかく探して見ようと棚の一つの扉に手を掛けた。カラリ、と古いレールの音が聞こえた。兎にも角にも写真を見付けなきゃいけないの一心で、黄色のまだ綺麗なファイルを手に取った。ラベルには、同級生である真川立華の几帳面な字で「新入生」と書かれていた。開くと、新入生代表のスピーチの記事が目に入った。ああ、入学式特集の時の資料ファイルか。と橘谷は思い出す。ラベルと同じく几帳面な字で書かれたメモや、インタビューの記録などを追っていきながら頁を捲ると、生徒会運営資料とプリントされたB4の藁半紙が二つ折りで入っていた。

（真川の彼氏は生徒会役員だったか）

どうでもいい事を思い出しながら、その藁半紙を取り出し開く。そこには五枚の写真が挟んであり、床に落としてしまった。拾おうと屈みながら新入生代表の名前を探す。桜陸高校の新入生代表は入学成績上位五名になる。となると。

（来宮さんもか……）

何故か橘谷はげんなりして、後の四名の名を追う。

そこには幸福にも、小波未夏の名前が有った。しかし、天堤の名前も写真もない。拾い上げた五枚の写真には、二人のフロントショットが写っている。橘谷は三枚の写真を、コピーした資料に挟んでファイルを戻した。他のいくつかのファイルを物色すると、秋のミスコンの取材担当である部員のファイルに写真があった。今から女

子生徒の取材を始めてるあたり、新聞部がミスコンの記事に力を入れていたことがわかる。部屋を後にした時、もう時刻は七時丁度であった。

外はすっかり暗闇が支配していた。

*

A棟三階の廊下には、突き当たりには有る嵌め殺しの窓からの西日が差していた。もう七時に為るというのに、四月には珍しい長い夕方だった。もうすぐ五月に為るからだろうか。それにしたって、明るいのは珍しい。と、来宮は歩きながら考えた。明るいとはいっても、沈みかけの夕陽が粘っている鈍いオレンジ色と暗闇が迫っていることを示す薄紫色だ。すぐに暗闇に包まれる。高校の敷地内に設置された、五十余りの電灯が点灯されるのは七時丁度である。桜の季節には、数種類の桜が咲き乱れ、ライトアップされた夜桜がとても綺麗だ。

（ふうむ。古典同好会の担当教諭は誰だったか）

来宮は記憶の引き出しを慎重に選び、確認していく。どうも必要な情報が見つからない。そうこうしているうちに、古典同好会と書かれたプレートが掛かっている部屋に着いた。来宮は躊躇う事なくドアをノックした。すぐに中から声が聞こえた。

「どうぞ、入って下さい」

「失礼」

来宮はドアを開く。中は化学実験室よりも幾分か狭い、殺風景な部屋だった。一人しか人間がいなかった。しかも、制服を来ていないから、生徒ではない。

「貴女一年の来宮さんだね？ 入部希望かな」

男である。来宮は見たことある様な、そんな気もしたが明確な覚えはなかった。

「あ、いや。そういう訳じゃないんです。ちょっと、天堤さんに用

が……。来宮と言います」

「ああ、そうか。君、キケンだったよね」

（キケン？失礼な奴だ）

この顔に、やはり来宮は見覚えが無い。

「ああ。華和ち……天堤さんなら今帰ったところ」

「そうですか。一つ聞いても良いですか」

来宮は名前も判らないこの男に質問する。

「何？」

「天堤さんと、小波さんって、仲が宜しいのですか」

「あの二人？ 仲良いんじゃないかな。俺はこの同好会の顧問でもないし」

「じゃあ、なんで此处に」

「別に。ちよつと野暮用があつてね」

胡散臭い笑顔を浮かべながら、座ったパイプ椅子を軋ませた。

「君こそ、なんで天堤さんなんか。キケンなのに」

「野暮用です」

（キケン、キケンて五月蠅い奴）

来宮は無駄か、と諦め、部屋をでようとした。

「俺の事、判ってる？」

「はあ？」

突然の言葉に思わず、不信任感を丸出しにした声を上げてしまった。

来宮は敬語を使うのがいい加減嫌になつて来た

「キケンの副顧問だよ」

「幹野朔也、教諭。貴方だったんですか？知りませんでした。なかなか学校も広いものですから」

来宮は皮肉めいた口調で言い放つ。幹野朔也は困った様な笑いを浮かべた。キケンとは、危険物研究同好会の略だと来宮は初めて気が付いた。

*

すっかり暗くなった外を見ながら、蛍光灯の灯ったB棟の廊下を橘谷は一人で歩いていった。校内履きは鈍い足音を立てる。B棟は校内で一番敷地占有率の高い建物だ。両側に教室が並ぶ。化学実験室と家庭科予備教室の間と、家庭科室と金工予備教室の間に、違う言い方をすれば、化学実験研究室と技術科予備教室の間、技術科教室と生物科学研究室の間に自販機の置かれた休憩スペースの様な場所がある。そして家庭科室と金工予備教室の間のスペースの北側に、二階へ上がる階段があるのだが、一階だけ普通の階段より狭い。前にも述べた様に、各教室には最高三つの予備教室が付く。しかし化学実験室は、去年熊倉教諭が着任した事で設置したため、予備教室は研究室のみだ。

（それにしても、なんでこんなに広いんだ。人数はマンモス校というほど居ないのに、設備がこつとも立派なのは何故だ）

橘谷は二階の廊下を歩いていた。両側に教室があるせいで、蛍光灯が点いていても薄暗い。普通なら殆どの生徒は帰宅している。橘谷は、自分は男だから夜道は構わないが、来宮は女一人大丈夫なのか、と心配したが、誰か迎えに来るだろうと勝手に思い込み、考えるのを辞めた。

狭い階段を下り切ると、地下でもないのに一層暗くなった。外は電灯が煌々と淡い光を放っていた。蛾が飛び回るのが目に入る。

一階では、化学実験室しか明かりは点いてなかった。

「遅いぞ橘谷君」

「まだ七時に為ったばかりだろ。別れてから二十分と経ってない」

「あーはいはい。で、写真はあったか？」

橘谷は来宮の写真は渡さず、二人の写真を渡した。来宮は親しくはないにしても、やはり面識はあるらしく、ああ、と声を漏らした。「一度だか話した事はある。明日昼間にでも私が話を聞いてこようかな」

「わかった……」

何か腑に落ちない表情をする橘谷。来宮はすぐに気付いた。

「ん？何か不満そうだな」

「なんか、僕が相談されたのに君が会いにいつて良いのか？」

「うん、まあな」

少し苛々した様に来宮はいった。先程会った幹野が気に入らないのだ。

「それとも何か？自分の役目を取るなど？」

「別にそこ迄言ってないだろ」

「失敬。八つ当たりだ」

来宮は申し訳なさそうに断った。橘谷はこれ以上言及することをやめた。

「じゃあ、明日一緒に聞こうよ」

「ん。わかった」

腕を組んで脚も組んだ来宮が大きく踏ん反り返り、大きく溜め息を吐いた。しかしワンピースでその格好だと、下手すると下着が見えてしまう。冗談じゃなく。橘谷がそこに思い当たると、すぐに指摘した。

「来宮さん。下着見えるよ」

「橘谷君が見なきゃいいのだ。窓の外でも見てい給え」

「……………」

年頃の女子がこれで良いのだろうか、と橘谷は考えたが、来宮は普通とは違うので良いのかと納得した。橘谷が言われた通り窓の外を見ていると、くすくすと来宮が笑い出した。

「橘谷君はいやに素直だよな」

「……………はい？」

「安心しろ。ワンピースの中にはスパッツを履いている」

「……………」

やはりそういう問題ではないと橘谷が考えていると、くすくすとまた来宮が笑った。

「しかし、異性にそこを注意されるとは思わなかった。意外と古風

だな君は」

橘谷は来宮が開けっ広げ過ぎるだけではないかと納得いかない。なにせ見た目がずば抜けて他人より古風な来宮に言われたのだ。

「し、下着が見えそうなのを注意するのは当然だろ」

いい加減下着と発音するのが恥ずかしくなり「やめやめ」と話を止めた。くつくつと喉を鳴らしながらも、来宮は話を変えた。

「じゃあ明日の放課後またここに来てくれ」

「新聞部の方は平気かな」

「どうにかしろ。49人も居るなら48人でもやれる」

何故か人数を把握されていて橘谷は驚いた。

「……よく人数知ってるね」

「ふん。真川とかいう二年の女子が聞いてもいないのにべらべら喋ったんだ」

お喋り好きの同級生を思い出し、橘谷は苦笑を零した。

「じゃあ帰るか」

「そうだね」

「私は鍵を返して帰る。先に帰れ」

「送ってかなくていい？」

一応聞いてみる。

「迎えが来るから構わない。いいから帰れ」

そう言うので、橘谷は「わかった」といい化学実験室をでた。その時、時刻は七時半に差し掛かるうとしていた。

第三章 散るべきは桜だけ

朝から風も無く、暖かだった。橘谷はそこそこ得意な物理の授業もHRも終え、化学実験室に向かっていた。新聞部へは、昨晩の内に榮戸に連絡してあるので行かなくても問題ない。もともと戦力外だ。悔しいが昨日の来宮の言葉は当たっていた。

天堤や小波とは会わなかった。広いんだ、仕方が無い。と橘谷は深く考えなかった。

化学実験室には、部室からより早く着いた。来宮は既に実験室に居た。

「どうも」

「全く、もっとマシな挨拶は出来ないのか」

「は？」

橘谷は来て早々いきなり怒られて間抜けな声を出した。しかし「どうも」がそこまで酷い挨拶だろうか。

「ああ橘谷君、遅かったな。待ちくたびれたぞ」

「はあ」

「なんだ。乗っけからやる気零か。いい度胸だな」

「ちよつと待つて。どうしたの？」

いやにピリピリしている来宮に、橘谷は質問するのを禁じ得なかった。

「橘谷君」

「何？」

「これを見給え」

「え？」

来宮が指差した先を、首だけで見る。そこにはにっこり笑った幹野が座っていた。橘谷とはあまり面識がない。ここの副顧問であることは勿論、此处へ来る前から知っていたが。

「幹野先生」

「やあ橘谷君」

「橘谷君、先生なんて付けなくて良い」

「どうやら来宮のピリピリの原因は幹野らしい。二十三歳だという。」

「酷いなあ、副顧問に向かつて」

「取り敢えず副顧問。今直ぐ出てけ。二度と来るな」

「ふんふーん。今は帰るけどねー、また来るよう」

幹野は茶化して言った後、座っていた木製の椅子から立ち上がり鼻歌と共にさっさといった。

「な、何」

「彼奴、私来た時此処に居たんだよ。まだHR終わったばかりで二時半にもなって無かったのに」

「現在はまだ二時半を回っており、三時といっても無理は無かった。」

「ああ。今日聞いてみたんだ。天堤嬢以外に」

「何を？」

「阿呆！ 小波嬢についてだ！」

「あ、ああ……。ゴメンゴメン……」

後頭部を掻きながら謝る。

「二人については解らなかった。小波嬢とは会えもしなかったよ」溜め息を吐きながら肩をすくめる。

「色々忙しくって、五時限目の学年総会の時話を聞いていたんだ」学年総会とは月一で開かれる大きな学年会議だ。学年によって日にちが違つて、知らなかった。

「数人の名前は判つたんだ」

来宮はずっと座っていた教壇の椅子から立ち上がり、黒板に向かった。白チョークを手にとると名前を書き始めた。

「ちよつと、此処授業で使わないの？」

「ん？ ……ああ。作つたは良いけどな。熊倉の奴は第二理科室を使つてるらしいぞ」

「ふうん」

橘谷はそんな教室の使い方をしていいのか、と考えた。というこ

とは、来宮は此処の主なのだろうか。

来宮は橘谷の思考を打ち消す様に、板書の音と声で遮った。

「まず小波未夏」

中心に名前を書いた。カツカツと音が響く。橘谷は身近な椅子に腰掛けた。

「そして天堤華和」

「なかなか豪華な名前だなあ」

橘谷はぼつりといった。

来宮は此处で書く手を下げた。

「天堤嬢は小波嬢に嫌悪感を匂わせていたらしい。同じクラスの女子の情報だが、どうやら“あの男”が原因の様だ。両方に言い寄っていたらしい」

「それじゃあ、男がケイチちゃん？」

「いや、違う。小波はその男を嫌っていた様だからな。当たり前だ」再度板書を開始する。

「次に榮戸敬」

「え？はっ、ちょ、ちよつと待って」

「どうした？」

「榮戸は新聞部の部長だよ？天堤さんが来た時にもいたんだ」

「面識は無いようだよ。こいつは小波嬢の幼馴染みだ」

思わぬ名前の出現に橘谷は困惑した。来宮はその様子に溜め息を吐いた。

「まったく。これしきで悩んでどうする？これが小波嬢を殺す訳じゃないだろ？」

来宮が困ったような顔で言う。そしてフォローするように、諭すような口調で付け足した。

「君の中で、彼はレギュラーな存在だからな。こういうイレギュラーな事例でその名前を聞くと、違和感を感じるんだ」

「……そう、だね。ゴメン」

来宮はもう一つ溜め息を吐いて、新しい名前を出した。

「多村慧子」

「ああ、古典同好会の顧問」

「多村教諭は小波嬢の伯母だ。父方の妹らしい」

「はあ。意外な繋がりがあるんだ」

と、橘谷は素朴な疑問がわいた。

「……何処で聞いたのそんな話」

「賀名先輩」

古典同好会の部長である。それより橘田には、来宮も先輩と呼ぶのか、という部分で驚いた。自分が呼ばれないから、てつきり誰も先輩扱いしないのかと思っていたのだ。

「三年生は皆、先輩つけるぞ」

「えッ？」

そして会ってすぐの会話を思い出していた。橘谷と来宮は今現在同じ年故に、この扱いなわけである。それなら釈然としないわけではないが、とりあえず納得することができる。

「ああ、それで。同好会の欠席をすんなり認めたのもその為だろう」

来宮は次の名前を書くように止まった。橘谷は何の疑問も抱かず、それをじつと眺めている。しばしの沈黙。

「たいっへん書きたくないんだが」

「ん？」

「冒頭に述べた“あの男”。あれは幹野朔也だ」

「はあ？」

「あいつは数人の生徒を口説きまくってた様だ。最低人間だな」

来宮はチョークをカタリとチョーク入れに戻した。そのまま苛立たしげに教壇の上を往復する。

橘谷は苦笑とも微笑ともとれない情けない顔をした。

「あいつは何様だ？まったく……」

「き、来宮さん」

「なんだ」

「ケイちゃんは誰だと思う」

橘谷が無理矢理話を逸らせる。来宮は、ハツとした表情を見せた後すぐに考える仕種をした。

「多村教諭が一番怪しいと思うんだ」

「多村、慧子だから？」

「ああ。安直過ぎではあるがな。彼女の回りにはケイちゃんがいない。多村慧子を除いて」

来宮は赤いチョークで「ケイちゃんか」と多村慧子の名前の下に書き足した。来宮の字は大人しい、綺麗な字だった。

橘谷は「ケイちゃん」がそんなに大切な点なのだろうか、と考えてみた。天堤は小波をあまり好く思っていないみたいだったし、わざわざ橘谷に相談したのは「ケイちゃん」が悪者という概念を植え付けたただけなのではないか。しかし、市ヶ谷の紹介ということ、橘谷はその考えは捨てる事にした。

「そもそも、なんで市ヶ谷なんだろ」

「放送部の問題児か」

「……問題児」

「なんだ」

「いえ、何でも」

率直過ぎだろう、と橘谷は思った。トリックスターとちよつとばかり格好いい異名を付けてあげた先輩は無駄骨か。

「天堤さんと市ヶ谷の共通点が無い」

「ああ、あれはだな。天堤嬢が放送部の前でうろろしている所を問題児から話し掛けた様だ。ナンパだ、最低だな。見てた人間がいた」

「あははは……」

市ヶ谷は新学期の愚行で大変嫌われたらしい。今朝、市ヶ谷に橘谷が来宮の写真を橘谷が見せると「うつ」と息を詰まらせていた。

「きつと、藁にも縋る思いだったんだね」

「橘谷君も以外と酷い事言ってるの知ってたか？」

「え？」

橘谷はその言葉が真剣に解らず、首を傾げるばかりだ。

来宮が時計に視線を移した。三時十五分。

「ねえ来宮さん」

「なんだ橘谷君」

「同好会って四人居る筈だよ、限々」

資料の中身を思い出していった。

「あ？ ああ。名義だけだよ。此处を使う為の口上だからね」

「危険物研究同好会って何するのさ」

率直な疑問をぶつける。四人いなくては立ちあげられないので、本当にぎりぎりである。

「危険物を研究するんだ。読んで字の如く」

「はあ」

納得してない顔で、橘谷は溜息のような相槌をうつ。来宮はそれを見て説明を付け足す。

「主に毒物だな。窓際に花が沢山有るだろう」

「うん」

橘谷は窓際に目を向けた。そこには数種類の花が見て取れた。

「奥から鈴蘭、水仙、鳥兜、走野老、狐の手袋」

「狐？」

「ジキタリスだよ」

「それって此处にあっていいの？」

「毒物を扱う資格だって持っている」

「はあー、そういうば」

橘谷は特記事項を思い出した。

鈴蘭、ジキタリス、鳥兜、よく見ると花が付いている。来宮が座っている教壇の上には、福寿草の植木鉢が載っていた。

「福寿草も毒草だったっけ」

「そうだ。全草にシマリンなどの強心配糖体を含んでいるんだ。服用すれば、嘔吐、呼吸麻痺、心臓麻痺、最悪死に至る」

「お目出度い花なのにな...」

「人間が勝手に決めただけだ」

来宮は福寿草を人差し指で突っ突いた。しっかり根を張った花は、申し訳程度に葉を揺らしたただけだった。

「あーああ。完璧手詰まりじゃないか。なら橘谷君が付きつきりで護衛していた方が確実だよ」

「なんでケイちゃんの正体当てみたいになっただけだっけ」

「阿呆が。それくらい考えろ」

橘谷は腕を組み、考えあぐねる。すると、廊下から大きな足音が聞こえて来た。陸上部が鬼ごっこでもして居るのだろうか、と橘谷が平和に考えていると、化学実験室の扉が大きく開かれた。

「……あ、ああ」

そこには今にも倒れそうな蒼白の天堤がいた。来宮も橘谷も驚いて顔を見合わせた後、天堤に視線を戻した。

「み、なつが……あ、うう」

「どうしたの？ 落ち着いて、ほら深呼吸」

橘谷が近付いて落ち着かせる。天堤は蒼白の表情のまま、橘谷を見上げた。

「いま、この上の、お、おく、じょうで……未夏が……」

「どうしたの？」

「し、死んでるのっ！」

*

来宮は冷静だった。天堤を職員室に向かわせ、急いでB棟の屋上に向かう。三階の階段から上に向かうと、何時もは施錠されているドアが開け放たれていた。橘谷は屋上に出る事が出来ず、来宮だけだ開け放たれたドアから屋上を見詰めていた。その顔は不謹慎ではあるが見惚れてしまうように綺麗で人形の様だった。橘谷は何をしいのか解らず、ただじっとしていた。来宮は意を決した様に、屋上に足を踏み入れた。

「あ、きのみ……」

「橘谷君」

来宮は呼ぶ様にも、止める様にも聞こえる様に名前を言った。また橘谷は動けなくなってしまう。来宮の姿が完全に視界から消える。ああ、行かなくては、と橘谷は思い、重い足を動かす。

俯きながらドアの前に立つ。自然と詰まっていた息を吐き出す。

そして屋上を覗いた。そこは、思い描いていた様な惨状では無かった。一週間前までは満開だった桜の花。広大な敷地に数え切れないほど植わった桜。その花弁が、巻き上げられて屋上に積もっていた。ドアの形に切り取られた視界は、青い空と桜色が支配している。その中心に来宮が立っていた。立ち止まってこちらを振り返る。来宮の向こう側に、深いグリーンが垣間見えた。

まるで、

来宮はこちらに戻って来る。歩く度、足下の桜色がひらひら舞い上がる。

「橘谷君。橘谷君」

「あ……」

「橘谷！」

「はい！」

橘谷は来宮に怒鳴られて、我に帰る。二人で屋上を再度覗く。そのとき、大きな風が吹いた。桜が舞った。季節外れの桜吹雪。強風に目を細める。もう一度目を開けた時、橘谷は現実を把握した。

屋上の中央に、小波と思われる女子生徒が横たわっていた。

まるで、

「桜に溺れた様だな」

「うん」

「まあ、胸元のアレが無ければな」

橘谷は目を凝らす。女子生徒の胸元には刃物が突き立てられていた。

「うつ」

「橘谷君、大丈夫か」

「た、多分」

「ふん、やっと来たか」

来宮は階段の下を見下ろす。そこには多村慧子、幹野朔也、天堤華和、そして榮戸敬が立っていた。

「小波さんが死んだって本当なの」

「ええ先生。御覧になったら如何ですか」

来宮はその場の全員を皮肉る様に言った。その言葉で、天堤以外の三人が階段を駆け上がり、屋上へでる。来宮は何か知っているのだろうか。橘谷はそう感じていた。

「そんな、馬鹿な……。なんで未夏が……」

「……何なんだよ」

「……………」

榮戸は呆然と離れた所で立ちすくんでいた。多村もその足下でへたりこんで嗚咽を漏らしている。幹野はさらに後ろで何も言わずただ屍体を見詰めていた。

「三時四十分ね。十分も何してたんだ」

来宮が腕時計を確認する。

「あ、あああ」

階段の下で、天堤の体がぐらりと頽れる。急いで橘谷はそばにより、背中をあやす様に叩きながら、「落ち着いて」と声を掛ける。過呼吸を起こしかけている、唇が青い。

「橘谷君」

来宮が上から声を掛ける。橘谷は天堤を支えながら来宮の方を向いた。

「何？」

「いや、何でもない」

来宮はそう言っつかぶりを振る。ワンピースのポケットから黒い携帯を取り出した。

「どうせ警察なんか連絡して無いんだろ」

独り言を言ってから、来宮は110番に電話を掛けた。

「橘谷君、学校の住所」

「えっと……、ああつとね横浜市」

橘谷は記憶していた学校の住所を来宮に伝える。天堤は泣くこともままならず、体を震わせている。

「はい、はい。お願いします」

来宮は淡々とした様子で電話を切った。すぐに屋上に向かって怒鳴る。

「幹野、天堤を保健室に連れてけ！」

「え？ あ、ああ」

屋上に続くドアから幹野が顔を出してから、体を出す。顔に血色が戻ってきた様だ。小走りで階段を降りてくると、天堤の肩を抱く様に立ち上がらせて橘谷に「ありがとう」というと階下に降りていった。橘谷は再び階段を昇り、来宮の近くへ行った。

「すぐに警察が来るさ」

「うん……」

橘谷は呆然と佇む榮戸の後ろ姿を見つめた。

「部長、どうして此処に」

「さあな。ほら、外に出て警察をお出迎えするぞ」

「う、うん……」

来宮はさっさと階段を降りて行く。橘谷がもう一度屋上に視線を移すと、榮戸と目が合った。

「あ、橘谷か……」

気づいてすらいなかったようだ。その驚愕が消えたのち、榮戸は不安げに顔を歪めた。

「……大丈夫です」

何が大丈夫なのか、橘谷自身も解らなかった。

こう、非日常というのは突如襲って来るらしい。さつき迄目の前には屍体があつて、悲しむ人達が居て、それを只感情も無く見詰める人間が居た。そんな事、離れて五分も経てば信じられない出来事だ。あまりに身近過ぎて、程遠い。嗚呼、自分は何を考えているんだろう。

橘谷は只、思考を強引に止めることしか出来なかった。

橘谷の隣りに居る来宮は淡々としていた。保健室には校医と幹野が天堤に付き添っている。

「あのう、通報をしたのはあなたですか」
「そうだ」

橘谷はそこで妙な違和感を感じた。

「おい。なんで交番勤務の下っ端巡査が来てるんだ」

「いやあ、高校生からだつたので悪戯だろうと、先輩が……」

「B棟の屋上だ。お前で良い付いて来い」

橘谷はこの情けない制服警官に何とも言えない視線を送る。来宮はさつさとB棟に向かって歩き出す。先程出てきた化学実験室の窓からひょいっと中にはいつてしまった。橘谷も警官もそれに続く。

なんとか窓枠を飛び越し、制帽を直しながら警官は申し訳なさそうに聞いた。

「あのぉ……、人が死んだって本当ですか」

間延びした話し方をする警官に、来宮は露骨に嫌悪感を顯す。

「本当だと言っているだろ。そんな嘘高校生がつくか」

「嫌だなあ、屍体って初めてなんだよなあ」

ぶつぶつ何かを呟くのを、橘谷は無言で無視していた。来宮は舌打ちをして物凄い早さで階段を昇って行く。警官と橘谷は必死に着いて行く。

（嫌な感じの警官だな……）

よく解らない嫌悪感を橘谷は覚えた。

無言で屋上に着いた。警官が恐る恐る覗き込む。多村と榮戸は同

じ所に居た。警官はよたよたと近付いていく。怖々覗き込んだ後、目を逸らし独り言をいう。

「あ、ああ。もう死んでるよなあ。ああ先輩……悪戯じゃなかったっすよう」

警官は一人でぶつぶつ言いながら無線を取り出した。

「あ、あー。殺しです、至急応援お願いします」

向こうからの返答が返って来るが、橘谷には仔細は聞こえなかった。警官はやらねばならないことは判ってるのか、榮戸と多村を屋上から出る様に誘導した。榮戸は少し血色が戻って来た様だが、瞳が揺れている。少し広い踊り場に四人の人間が居る。

「あのお」

「なんだ」

「此处、人が沢山来るんで、何処かに集まって居てもらえますか？あと、偉い人に……ああ、校長が良いのかな。理事長かなあ……」

生徒も帰さなきゃ行けないしなあ……」

警官は一人でぶつぶつとうわ言の様に呟いている。来宮はいい加減限界が来たのか「あ」と口を挟んだ。

「この橘谷君が先生方には連絡します。私はこの二人を連れて保健室にいます」

勝手に役割を決められ、橘谷は来宮に縋る様な視線を向ける。

「なんだ橘谷君。早く行くんだ」

「やあ……助かるなあ。でもこれでいいのかなあ」

橘谷は二人の言葉を流すように、無言で職員室に向かって走り出した。

*

職員室に行き、事のあらましを話すと、先程警察から連絡があったらしい。来宮が通報した時だ。やはり、確認はしたのだろう。しかし、現場がB棟の屋上という事で、A棟の職員室からは解らない。

悪戯だと、学校でも思っていた様だ。現に、「悪戯だと思ったのに」と、教頭は青くなり、急いで理事長に向かった。教務主任の女性教諭は、全校の生徒を帰す為、放送部へと走って行った。

また役割を無くしてしまった橘谷は、来宮を待たずして保健室に向かう事にした。保健室は職員室の真下だ。階段を降りればすぐに扉が見える。訳も無く足音を立てない様に階段を降りて行く。

すると、保健室の方から、天堤の泣き声とも言えない嗚咽が聞こえる。やはり相当なショックだったのだろうか。橘谷は入る事が憚られて、扉の脇に、背中を預け来宮を待つ事にした。

その後、生徒は来宮、橘谷、天堤、榮戸を除く全員が帰された。部活、同好会共に休みが多く、すぐに全員が帰宅する事が出来た。最後の一人が出たのは、屍体発見から三十分。警察は裏の職員専用の通用門から敷地内に入った。遅咲きの八重桜が、異様に綺麗な花を咲かせていた。

*

橘谷は保健室の中の長椅子に座っていた。来宮は怪我人が座って手当てを受ける回転椅子に座り、腕を組んで何も言わない。天堤はベッドに腰掛け、幹野はそれに付き添う形で同じように腰掛けている。多村はもう一つの長椅子に座り、放心状態のまま、窓の外を見つめて居た。榮戸は座る事なく、入口に一番近い壁に、凭れ掛かり、俯いて居る。警察は未だこちらには来ず、職員室に寄っている様だった。

校医は職員室に呼ばれ、保健室の中には事件の関係者しか居ない。天堤の嗚咽がまだ止まない。それでも、泣いてはいない。

来宮はきい、きいと音を立てて回転椅子を軽く左右に往復させる。その音が、室内に響く。橘谷が、校医の卓上に置かれたデジタル時計をみると、もう四時二十五分であった。

アナログの時計はないから、秒針の音すら聞こえない。耳を凝ら

せば、来宮の腕時計の音が聞こえるだろうが。天堤の鳴咽だけが、不規則に部屋の中に響くだけだった。

そこで、保健室に大きな足音と、歩幅の狭い小さな足音が二種類階段を降りて来る。ぼそぼそと話し声も聞こえる。全員が何故だか息を殺した。

もう、嫌だなあ。

橘谷は一人、息を殺すこと無く、盛大な溜め息を吐いた。市ヶ谷が紹介した相談事は、やはりろくな事では無かったと、最初に感じた軽い不信任が、絶対のものへと変わった瞬間だった。

第四章 光と影は対である

室内の沈黙を破ったのは、荒々しく扉を開ける音だった。その音に来宮は顔を上げた。橘谷も同様に顔を上げ、扉の方を向いた。他の人間は俯いたままだ。

「あ、あー」

中にはいつて来たのはえらく背の高い男と、冴えない顔の男の二人組だ。勢いよく入ったのは良いが、中の沈んだ雰囲気にも何とも言えなくなった様だ。入口で扉に手を掛けたまま氣拙そうに佇んでいる。もう一度扉を閉めようとする手をおさえ、冴えない方が申し訳なさそうに口を開いた。

「あ、のー。県警の者ですが……」

「県警の下町み……だ。話を聞きたい」

「吉田一です」

冴えない男の一言で調子を取り戻したらしく、胸ポケットから警察手帳を取り出した。来宮はこれみよがしに溜め息を付いた。他の人達は黙り込んだままだである。

「取り敢えず発見時の話を聞きたいん……」

「まったく。デリカシーのない刑事だな。見て判らないのか、総じて深いシヨックを受けているんだ。時期を見ろ、時期を。空気読め」

来宮の挑発的な言葉に「なっ」と呻き声を漏らしながらも、引きつった顔で「すまなかった」と詫びた。

「ふん。橘谷君」

「えっ、はい」

「説明」

来宮は有無をいわさぬ口調で橘谷を促した。此処で吉田と名乗った刑事が口を挟んだ。

「隣室を取調室にしてあるんで、一人ずつお話し聞きたいんですが……」

「なんだ。急だなあ。橘谷君の話だけじゃあ駄目なのか」

「人が死んでんだよ」

「知っている」

来宮と下町は初っ端から相性が悪いようだった。橘谷は来宮の言った事は正しいと思った。天堤は話せる状態ではないし、多村もまた然りである。幹野と榮戸であっても、疲労困憊は見取れる。

「はあ」

「どうします、み……つぐふう」

何かを言いかけた所で下町が思い切り吉田の脳天を殴った。

「名前で呼ぶな」

「下町さん……どうします？」

「そうだな」

「明日、この四人には話を聞けば良いだろ。橘谷君は今すぐレンタル可だ」

「は？　ちょ、ちょ、ちよつと待って！」

橘谷はその場の空気もお構いなしで首を横に振った。

「大丈夫。私も付き合おう」

「じゃあそうさせて貰うか」

「助かります」

何故最後まで自分は付き合わされるのか、橘谷は解らないまま、OKしてしまった。

橘谷は悶々としていた。保健室の面々は、保護者が迎えに来たり、車を回したりとバタバタと帰っていった。榮戸は多村とも交友があるのか、一緒に帰路に就いた。天堤は母親と祖父母が揃って迎えに来た様だった。妙に身なりの仕立てがいい。その時、天堤の祖父を見て、来宮が何かを呟くのを橘谷は耳にした。幹野は一人、愛車で帰った様だ。

そして五時になるつかという今現在。保健室から場所を移し、職員室隣の大会議室に来宮を始め、橘谷、下町、吉田の四人が適当な位置に座っていた。橘谷は一番奥の席に座り、その右隣り一つ空

けて来宮が座っている。下町は来宮から一番遠い入口近くの席に、吉田はその真向かいに腰を下ろした。来宮と下町は相変わらず臨戦態勢を崩さず、橘谷、吉田は合わせた様に同じタイミングで溜め息を吐いた。

「橘谷君、何溜め息を吐いている」

「吉田でめえ何か文句あんのか、ああ？」

来宮と下町がそれぞれの相手を睨む。

「いや、別に……」

「な、ないですよ」

橘谷は誤魔化すように左上へと視線を泳がせた。

「あ、あのー。じゃあ話を聞きましょうか、ね？」

「ああ」

吉田も下町の敵意剥きだしのオーラを払拭する様に話を切り換えた。橘谷もここぞとばかりに便乗する。

「そ、そうですね」

来宮は「ふん」と言っただけ黙ってしまった。

「第一発見者は」

「あ、天堤さんです」

「何でお前らが出て来たんだ」

下町は来宮と目を合わさない様に橘谷を見ていた。

（そんなに嫌か）

橘谷は心中で苦笑しながら、次の質問に答えた。

「相談されてたんです」

「害者からか？」

「いえ天堤さんから」

「何故だ」

「友人に紹介されたみたいです。僕を」

橘谷は放送部の友人の顔を思い浮かべた。

「何だ、お前相談窓口でもやってんのか？」

「橘谷君はお人好しで無駄に優しいからな」

「慕われてるんですね」

「お前に聞いて無い、吉田も關心してんじゃねえ」

「はいはい…」

下町は「けっ」と投げやりに言った後、橘谷へ質問を再開した。

「で？ 何を相談された」

橘谷は天堤から聞いた話を、なるべく忠実に、話し始めた。

*

「なるほど」

全て話し終わった後、最初に発せられたのは吉田の冒頭の言葉だった。茶色の手帳に何かを書き付けながら話を聞いていた。

「橘谷さんが、来宮さんに話を持って行ったと」

「はい。まあ、そうですね」

「…何だよ」

「何か言いました？」

ポソリと呟いた言葉にニツコリと笑った来宮が制した。

「いや。おい、何か他に聞いて無いのか」

「ああ、何か複雑そうでしたよ」

橘谷は天堤と小波、幹野の三角関係を思い出した。

「亡くなった小波さんと、天堤さんは幹野先生を取り合ってた？の
かなあ」

「違う。幹野が両方にちよっかい出してたんだ。天堤は本気にして
幹野を好きになった。同じようにちよっかい出されていた小波に嫉
妬してたんだ」

来宮がハッキリしない橘谷の言葉を訂正する。それを聞いて下町
は不機嫌な顔をして言った。

「じゃあホシはあいつか？」

「み……下町さん、安直過ぎですってえ」

「うっせーな。いま下の名前で呼ぼうとしただろ」

「いえ」

来宮はそれっきりまた喋らなくなった。橘谷は小さく溜め息を一つ吐いて吉田という刑事の方へ聞いた。

「あの……殺しで決定なんですか？」

「今のところは、そっちで捜査しています。どっちにしる検死の結果を待たない事には」

「はあ」

橘谷は来宮をちらと見た。橘谷は思わず目を剥いた。来宮は、
「ね、てる」

来宮は事もあるうに腕を組んで俯いたまま、すやすやと寝息を立てていた。来宮は決してこの事件に乗り気で無い訳は無く、寧ろ当事者である橘谷より乗っていた筈なのに、何故寝ているのだろう。

「おい、寝るタアどういう事だ」

「……さあ……」

橘谷は首を傾げ肩を竦めた。

「……まあ、いい」

「あ、じゃあ天堤さんと被害者は仲悪かったんですか？」

吉田は橘谷に向けて質問を投げ掛けた。

「いや、『殺される』って漏らすくらいですから……険悪って訳でもなかったんじゃないですか」

小波の話をしている時、天堤は真剣そのものだった。橘谷はそれを受けて、頼みを聞いたのだ。それを来宮に持って行ったのは未だに橘谷自信も解らない。

「じゃあ、後はケイちゃんですねえ」

ボールペンの尻で米嚙の辺りを叩きながら吉田は溜め息を吐いた。
「あの女の教師は慧子だろ。『ケイ』だ」

ふっ、と寝てた筈の来宮が笑った。

「だから安直過ぎだと言っている」

「そうですよー、光喜さん」

そこで沈黙が硬直に変わった。吉田は、はっ、とした顔をして手

帳に落としていた視線をそろりと下町光喜へと向ける。その目線の先には口端を引きつらせた下町の顔が睨んでいた。

「よーしーだー」

「ご、ごめんなさーい……」

吉田はそくさと数席離れる。来宮はくつくつと喉を鳴らして笑いを必死に堪えている。

「光喜さんって言うんですか？ それはまたきれ……」

「ああああ橘谷さん！ 駄目です、褒めちゃ駄目です！」

「綺麗」と言おうとした橘谷を吉田が必死に止める。橘谷はキョトンとした顔で口を閉じた。

「くっ、あはははっ。でかい図体して、みつ、みつきだって！ あはははっ」

「うっさい！ 好きでこの名前じゃねえよ！」

来宮が堪らず笑い出す。

「あの……事件……」

吉田が恐る恐る二人を止める。橘谷は今だ口を閉じたまま訳の分からない顔をしている。

「そうだったな。落ち着きたまえ。み・つ・き刑事」
「なっ」

「うるさいな。ほら次、橘谷君」

橘谷は次に何を話して良いか分からず。猛スピードで頭をフル回転させる。しかし、解っている事は全て話したし、何も調べていない。しかし橘谷はつい先程思い付いた事があつた。

「次って……。気になる事ならあるよ」

「なんだ」

「……天堤さんは、小波さんが亡くなった事を僕たちにすぐ知らせに来たんです」

下町は「あ？」と言って吉田をあれから睨んでいた視線を橘谷に向けた。

「別段、考える程のこたあねえだろ」

「いえ。僕たちは化学実験室に居たんですけど」

橘谷はゆるゆると視線を今度は右上に泳がせた。

「知ってる筈無いんですよ」

下町はよく判らないという顔をした。来宮は「ああ」と呟いた。続いて吉田も理解した様だ。

「僕が相談を請けたのは新聞部の部室なんです」

「そうか。私も話は聞いたし、橘谷の名前は出したが放課後の居場所までは…」

「知る筈の無い橘谷さんの居場所を天堤さんは知っていた、と」

橘谷は「はい」と小さな声で言った後、来宮の方を向いた。

「なんだ」

「別に」

「放課後にあなた方の居場所を知って居た方は」

吉田が手帳にメモをしながらどちらにでも無く聞いた。

「えっと……市ヶ谷と……」

橘谷が言った。

「幹野先生と部長……」

橘谷は自信なさげに言った。

「幹野は二時頃から化学実験室にいたらしい。まあ自己申告だけだな」

来宮は不機嫌そうに言った。橘谷は苦笑した後、「後は特に」と申し訳なさそうに言った。

「後は本人達に話を聴いた方が良さそうですね」

「ああ……」

下の名前がばれてからめっきり喋らなくなった下町が短く返事をした。吉田が苦笑しながら来宮に名刺を渡した。

「これ、何か思い出したら連絡してね」

「思い出したら、な」

来宮はすいっと、その名刺を携帯の入っていたポケットにしまった。

「じゃあ光喜さん、職員室寄って帰り……っ、ぎゃっ」
下町の投げたライターが見事に吉田の額を打った。

＊

五時三十五分。大会議室を出たのは丁度それをさした時だった。
出て直ぐに、来宮は大きく背伸びをした。額を少し赤くした吉田と
いまだ怒りの醒めやらない下町は「とっとと帰れよ」と言い残して
職員室に消えた。

「引き止めた人間が何を言うか」

（人を残らせた人間が何を言うか…）

と、橘谷が思ったのはもちろん秘密だが、来宮は知ってか知らず
かじろりと橘谷を見やった。橘谷は慌てて目を逸らし「さあ帰ろう
か」と、昇降口に向かって歩き始めた。

「そうだ。私が古典同好会に行った時。幹野は『今帰った』と言っ
ていたな…」

「別におかしくないじゃないか」

「擦れ違わなかった…」

来宮の言葉の真意が、橘谷には判らなかったのだった。

＊

まだ五時半か。付き合え。

と来宮の一言で橘谷は学校から徒歩二十分程度の駅前にいた。注
して大きい駅でもなく、ちょっと暇潰し程度の店が並んでいる。そ
の内の一軒、『K』という喫茶店に入った。客の入店を知らせるベ
ルが鳴る。

「何に付き合えば……」

「珈琲だ」

「かーふいー……」

「阿呆」

橘谷は肘で軽く鳩尾を打たれて「うぐ……」と唸った。別に呼吸困難になるほどでは無かった。

「寧ろ、話だな」

「はぁ……」

来宮は一番奥のテーブル席に座り、橘谷を呼んだ。

「座れ」

えらく横柄さが増幅してないだろうかと思っただけ、口に出すのは今まで通り止した。

「あの刑事、気に入らん……」

「まだ言ってるの……」

「ふん。ああ、いつもの珈琲二つ」

片手をあげて、カウンターの中の男に声をかける。

「橘谷君、君は」

来宮は意味深に言葉を切ってから、肩に掛かる髪を払い除けた。ふわり、と石鹸の爽やかな香りが舞った。

「君は、どう思う」

「何が？」

「この事件だよ」

橘谷が聞き返そうとした時、店主がカチャカチャとカップとソーサーの振動音と共に、珈琲を運んで来た。

「どうぞ」

それだけ言うと、すぐにカウンターの中へ入ってしまった。

「橘谷君。犯人は誰だと思う」

「え？あ、うーん。幹野先生は……」

「あいつは、違う……。馬鹿そうに見えて本当に馬鹿だからな、あの意味で」

橘谷はしんみりしたなか、思わず吹き出しそうになった。しかし『馬鹿そうに見えて本当に馬鹿』じゃあただの馬鹿だ。

「判んない……かな」

「そうか」

来宮はぼつりと独り言の様に呟くと、やってきた珈琲に口を付けた。その珈琲はブラックだった。橘谷はなんの躊躇いもなく口を付けた。

「普通だろ」

「う……、うん」

「それが良いんだ」

来宮は、ふ、と笑みを零してもう一口啜った。

「私はね橘谷君。この事件、終わらないんじゃないかと思うんだ」

来宮は暗い顔になり、溜め息を吐いた。

「でも、終わりは見えてる」

「来宮さん、なにが……」

「確信はない。だから口には出さない」

橘谷はこの目の前の少女を、穴が開くんじやないかという位、凝視していた。

「あ、橘谷君。阿呆面になっているよ？」

「え？ あ、うん。ごめん」

くすくすと、この二日間で一番年相応で愛らしく笑った。

*

珈琲はツケの様だった。余程信用があるのだろうか。橘谷は駅の前で別れ、一時間に一本しかないバスに乗った。来宮は優雅にタクシーで帰っていった。バスに揺られながら外を見ると、すっかり夜になっていた。橘谷は思った以上に疲れていた。人の死というのは、こんなにカロリー消費が激しかったのだろうか。

（何にしても、僕は当分非日常の住人だ）

参考書が二冊程入っている、黒い指定のスクールバックが、鉄アレイの様に重く感じた。

（来宮さんは、なにが解ってるっていうんだ…）

結局有耶無耶にされた事の真相を、急激に襲って来た眠気と戦いながら、ぼーっと考えていた。

そうして、気付いたら家の近くを軽く通り越していた。

*

「君は、真性の阿呆に決定だな」

翌日の放課後、化学実験室、ではなく、警察署の廊下。下町から再度の聴取をお願いされ、授業を終わってすぐに幹野、天堤、榮戸、多村の四人とともに赴いたのだった。警察署までは多村の車と、幹野な車に分乗する形になった。

「まあ、そうかも」

いい加減に自分は阿呆なのではないかと、橘谷は考え始めた。昨日はバス代をいつもより百二十円高く払う羽目になるし、帰りのバスが来ず、夜道を泣く泣く徒歩で帰った始末だ。

「あー、もう、なんかなあ……」

「投げやりだな。私も投げやりだが」

来宮は座っていた椅子の背凭れに溜め息を付きながら深く体を預けた。

「あいつには会いたくない」

その時、廊下の奥から足音が近付いてきた。

「ちっ」

「昨日振りだなあ、高校生」

下町であった。橘谷は「どうも」と言って会釈をする。来宮は外方を向いた。

「不愉快な歓迎だな、女子高生」

「ふん、不愉快な呼び方をしないでもらえるか」

一触即発の雰囲気、下町の後ろにいた吉田が怖々と口を挟んだ。

「あのー、聴取……」

「ちったあ、待ってる!」

「そつだぞ吉田！」

橘谷は『今時の女子高生』についての熱いディスカッションを始めた来宮と下町をひたと見据えてから、言った。

「来宮さん、下町さん、大人げない」

「そ、そつですよ」

吉田は便乗しただけなのに、思い切り脳天を殴られた。廊下には吉田の苦悶の叫びが木霊していた。

「殴るしか能が無いのか、光喜刑事」

「下の名前で呼ぶな！」

来宮のにやりとした笑い顔を思い切り睨め付ける。来宮は「おお、怖や」といつて肩を竦めた。

「こつちで話を聞く。付いて来い」

橘谷と吉田は、御互い顔を見合わせたあと、自分の相棒の後に着いていった。

「橘谷さんはこの事件どう思う？」

吉田が会議室の様な部屋に入つてすぐ橘谷に聞いた。

「ごめんね。一般人にこんな話聞いて」

すぐに「気にしないで」と問いを取り消した。

「橘谷君、何か話してない事はあるか？」

「いや……」

下町と話していたと見られる来宮が突如橘谷に聞いた。橘谷はその問いに事実を述べた。

「だろつ？ 聞いてない事はあるけどな」

「ふん。話す事も無いんでね」

下町は腕を組んでふん反り返る。

「そつだ。超耳寄り情報があつたんだ。ねえ橘谷君？」

来宮がいきなり大きな声でいう。

橘谷は訳も分からず「はい？」と聞き返し、来宮の近くに寄つた。すると来宮がにつこりと笑い、橘谷の足を踏んだ。

「いつ」

「しっ」

(つたあ……、話を合わせろ、と……)

吉田は下町の後ろにたったまま、橘谷は来宮の隣りに座った。

「な、なんだ。耳寄り情報って……」

下町が来宮に詰め寄る。

「耳を貸して」

来宮はそう言い放つと下町の首根っこをグイと掴むと引き寄せる。

「うおっ」

そのまま耳打ちする。

「は……い？」

その内容に下町は明らかに動揺した。

「どうしたんです光喜さん」

もう下の名前で呼ぶことを徹底する事にするらしい。吉田を叱る事も忘れぶつぶつと自問自答を繰り返している。

「あは」と来宮はお道化た。

「あは、じゃねえよ女子高生。あれか隠蔽こうさ……あだっ」

来宮は下町の脛を思い切り蹴りあげた。

「何しやがる」

「女子高生と呼ぶなと言っただろ。それと他言無用だ覚えとけ」

蹴られた下町は怒るが覇気が消えた。橘谷は違和感を感じながら

吉田に目を移すと同様に不審な顔をしている。

「おい吉田」

「あ、はい。なんすか」

「聞かれた事に答えてやれ。俺は戻る！」

言うが早いかすぐに下町は部屋を出てしまった。不愉快なものには変わりがないらしい。面倒なことになる前に退散することにしたのだろう。

「何なんでしょうねえ」

いまいち事情の飲み込めない二人の男を、来宮はくつくつと笑いながら見ていた。

「来宮さん何言ったの」

「ひ・み・つ、だ」

一音ずつ区切って言う様は、彼女を何も知らない人が見れば、なんと可愛らしい、位には思うだろう。橘谷は例外であった。吉田は元より鈍感であるらしい。

「そう、吉田君。聞きたい事が幾つかある。教えてくれるね？」

吉田は何か釈然としないものを無理矢理飲み込む様な表情ではあったが、来宮に素直に応じた。

「光喜さんに言われますしね」

吉田は肩を竦めて、あの茶色い手帳を取り出した。

部屋の外で荒々しくドアを閉める音が聞こえた。橘谷はあの上背の高い刑事を思い出し、少し気の毒に思った。

来宮は口許の笑いを隠すのに必死の様だった。

第五章 最善を尽くします

小波未夏の死因は、左胸上部の刺傷による失血死であった。桜吹雪で隠された屋上は、とても目を当てられない惨状であつたらしい。

「ちょうど動脈を切つてゐるんです。心臓に最も近い」

ナイフを胸にさす身振りをしながら吉田はいった。

「犯人の目星は」

「さすがにそれ」

吉田の言葉が詰まる。

（公僕として教えるべきではない。が、しかし先輩が、あの先輩刑事が「なんでも答えてやれ」といったのだから、個人名も出して答えるべきなのだろうか。いやでもあの人だし……）

「吉田君。だだ漏れよ、だだ漏れ」

「あ、う、え？」

「あのとかいっちゃん駄目だろう。先輩刑事を」

「来宮さん、聞かなかつた事にするのが良いね」

「や、あの。いえ、別に悪い意味では、いや、いい意味ではない、訳ないじゃないですか、あは、あはは」

しどろもどろになり、茶色の手帳をバシバシ叩きながら吉田は来宮のしたり顔に向かつて弁明した。

「解つた解つた。で」

「で？」

「犯人のめ、ぼ、し」

交換条件と言つた様になつて来宮は言つた。はあ……、と一つ吉田は溜め息を吐き、手帳を再度捲り始めた。

「えーっと、ですね。先程からの事情聴取に依れば、関係者全員にアリバイがありますね。死亡推定時刻の午後二時十五分から四十五分の間、一人になつてゐる人は誰も居ません。確認は現在取つてゐる所です」

来宮は黙りこくってしまったので、橘谷が二の句を継いだ。

「幹野先生はその間僕達と一緒にしたけど……。ねえ、来宮さん」

「しかし三十分には教室を出て行ってるぞ？ 完璧ではない。まあ、実行犯である可能性はない！」

大きな声で断言する。

「あいつは馬鹿っぽくて本当に馬鹿なんだ、ある意味でな」

苛々した様子で昨日と同じ事をいう。きつちり“ある意味で”を忘れずに。橘谷はもうそれについてなにも言及すまい、と継ぎの情報を模索した。

「こちらとしては、傷の状態からして被害者より背の高い人物かと考えて居ます。そうすると、今話に出た幹野朔也、そして榮戸敬、この二人です」

橘谷は、やはり榮戸の名前に戸惑いを隠せない。あの真面目な部長が犯人である可能性が有るのだろうか、ぐるぐると考えあぐねる。

「まあ人間、殺意さえあれば体格も超えて不可能な犯罪も犯せますからね」

吉田が手帳を仕舞いながら言った。

「他に何か有りますか？」

「今日はもういい。何か解ったら連絡するように、あの巨人兵に伝えてくれ」

「巨人兵？」

「下町光喜巡查長だよ」

くつくつと笑いながら来宮はドアを見ながら言った。吉田も、ああ、と納得した様子で諒解した。橘谷はどっと疲労感を感じ、溜め息を大きく一つ吐いた。

「さあ、帰らせてもらおうか橘谷君。お疲れ、吉田巡查」

「あ、はいお疲れ様、でした？」

やはり、何処か釈然としないように挨拶を返した。来宮はくつくつ笑ったまま、思いきり扉を開けた。するとがつつと何かに当たっ

た。

「いつ…たあつ」

「刑事が盗み聞きとは良い趣味してるなあ、下町刑事」

扉の外に居たのは下町で、それに気付いた来宮が思いきり扉をぶつけたのだった。

「痛いなっ！」

「あらあら、御免遊ばせ、気付きませんでしたわ、おほほほ。ほら橘谷君行くぞ」

そう言つてさつさと廊下を歩き出してしまふ。橘谷も後に続くとうすると、ぐい、と下町に襟を捕まれた。

「つぐう、……なんですか？」

下町は声を潜めて言つた。

「おい、お前。あの女子高生、気を付けろよ。下手したら……」
「はい？」

意味が解らず聞き返す。が、下町は手をひらひらと振りながら、もう背を向けてしまつていた。

「ほら、解つたらとつと行け。怖い女子高生が待つてつぞ」

下町は吉田とともに、橘谷と反対方向に歩いて行つた。

「橘谷君、早くしろ！」

「あ、はいはい」

橘谷は怖いけど気を付ける様な者だろうか、と考えながら、来宮の元に向かつた。

「何を聞かされた。あの巨人兵に」

「何も？特に変な事は」

「ふうん。なら良いんだが」

来宮は首の後ろを搔きながら、お腹空いたな…、と呟いた。

「もうすっかり夜じゃないか。もっと早い時間に呼び出すべきだ」

「事情聴取に時間は関係ないんじゃない？」

「五月蠅いぞ橘谷君。よし、夕飯食べて帰るぞ、奢れ橘谷君」

「はッ？え、ちよつと待つてよ」

「嘘だ。自分の分くらい自分で出す。取り敢えず食べて帰るぞ」
橘谷の貧しいお財布事情を解っているのか、自分の学生鞄を叩きながら言った。

*

「期待はして無かったが…」

「五月蠅いな、もう」

やって来たのは駅前のファーストフードだった。来宮が善く解らないから、と橘谷に任せただ。その結果、冒頭の台詞になるのだ。
「僕に何かを求めないでよ」

「言い訳」

「……………」

まあいい、と黙る橘谷に言ってチーズバーガーを一口嚙る。橘谷はポテトを一口に入れた。

「それにしてもさ、来宮さんの家って夜遅くなくても怒らないの？」

「……………は？」

「いや、『は？』じゃなくてさ。門限とかないの？」

事実、既に九時を指している。

「お前こそ」

「僕は男だし、親は家に居ないし……………」

「ふうん……………」

来宮もそれきり黙ってまた一口嚙る。

橘谷の家庭事情はそれ程複雑ではない。父母と姉兄一人ずつに猫一匹。至って平均。しかし、母親は予備校教師、父親は電力会社勤務、姉は去年結婚し家を出た。兄は大学の三回生で、寮に暮らしている。母親も父親も帰りが遅い。父親に至っては帰れない時もある。よって橘谷は家に一人なのだ。

「ま、家族仲は良過ぎるんだけどね」

「好事だ」

「うん」

ふう、と溜め息を二人して吐いた。駅前のファーストフードは閑散としている。他にも一人、若い男が居るだけで広い店内はがらんとしていた。

「それでさ」

「ん、なんら？」

丁度ポテトを口に入れた様子の来宮が視線を合わせた。

「飲み込んでからで良いよ…」

少し急いでポテトを喉に通す。

「失敬。……で、なんだ？」

口を拭きながら来宮は聞いた。

「昨日、来宮さんが言っていた事が気になってさ」

私はね橘谷君。この事件、終わらないんじゃないかと思うんだ。

来宮は、ああ、と言って椅子の背凭れに身を預けた。ポテトで油ぼくなった手をウェットティッシュで拭きながら話し始めた。

「どうも妙な事が有ってな」

「妙？」

「ああ。一つ、幹野が天堤の何かを庇っている事。二つ、その天堤がお前の居場所を正確に把握していた事。そして三つ、榮戸が多村教諭と一緒に居た事」

来宮は三本指を立て説明した。

「しかし」

「しかし？」

「どれも個人を犯人と特定するに足りない」

来宮はアイスコーヒーストロウで吸い上げ喉へと流し込む。「やはり、珈琲はKだな」とぼそり呟いた。

「橘谷君と初めて会った日の事だが、古典同好会に幹野が居た。天堤は『今帰った』と言った。A棟から生徒昇降口に向かうには、二階三階どちらかの渡り廊下を通り、B棟は避けて通れない」

「化学実験室は一階で、新聞部は二階、古典同好会は四階だよ。擦れ違わなくてもなんの問題も無い」

「今帰った、と言つても、あいつじゃ語弊が有つても可笑しくない」
「う、うん」

「それに」

来宮はアイスコーヒーの入っていた紙コップをくしゃりと握り潰した。いつの間にか、双方のトレイの上には食べ物が残っていないかった。橘谷は紙コップを握り潰す事なくプラスチックの蓋とストローを外す。

「元からそれは犯人と特定する材料には成り得ない」

「遺体に偽装されていた様な事は言つて無かつたしね」

「ああ」

握り潰した紙コップに更に力を加えた。

「しかしだなあ……」

橘谷はいそいそと片付けを始める。自分のトレイに来宮のゴミも載せ、更にトレイを重ねる。来宮は気にする事無く腕を組んで踏ん反り返る。

「しかし？」

橘谷はテーブルに幾つか置いてある御手拭きで手を拭いながら聞いた。

「逆もまた然り」

「逆？」

「犯人と特定する材料でないと同時に、犯人ではないと証明する材料でもない」

「えーっと、その材料だと、犯人だとも犯人でないとも言えない、と……」

「そういう事」

「無意味じゃないか」

「零では無い」

来宮は鞆から制服のボレロを取り出し、羽織った。五月近いとは

いえ、まだ肌寒い。ごそごそとポケットを探りながら身支度を整え始める。

「さあ、帰るか。私はタクシーを呼ぶ」

「そ、そう……」

橘谷も倅い身支度を　といつても軽く着崩れを直すだけだが整える。

「明日」

「へ？」

「明日放課後、化学実験室だぞ」

「あ、うん」

んー、と背伸びをしながら視線だけを橘谷に移しながら言った。

橘谷もさして気に留める事でもないので素直に返事をした。

「君も変わり者だなあ」

「え、何処を如何とると僕が変わり者なの……？」

平均を地で行ってる　と思つてゐる　橘谷は「変わり者」の

一言がどうも解せない。

「いや。気にするな。じゃあ、また明日な」

そのまま、二人は別れた。

*

嘘の様な穏やかさだった。生徒はざわつく事もなく、教師が沈む事も無い。幾人の関係者だけが『小波未夏』の死を偲ぶだけである。この静かさは異様だ。元々、小波未夏という人物が居なかった様に誰もが生活して居る。何時もより、静か過ぎる時間が流れていた。

「死とは残酷だ」

福寿草の鉢植をつつき、来宮が呟いた。福寿草は葉も揺らす事無く、凝乎つとしている。

その呟きに、答える人は誰も居なかった。

来宮は鉢植を定位置に戻すと、携帯を取り出した。開くと、時間

を確認する。

疲れた頭をふるふると振って、携帯を閉じた。するとそのタイミングで橘谷が扉を開けた。

「おう、よく来たな」

「よく来たな……って、来いっつったの貴方でしょうが」
「知っている」

橘谷はあははと乾いた笑いを漏らしながら、後ろ手に扉を閉めた。来宮は窓の外をちらりと見てから、六つ有る大テーブルの内、真ん中手前のテーブルの席に着いた。橘谷は目の前の席に座る。

「何か解ったか」

「聞く相手が居ないからね……。市ヶ谷に話は聞いたよ、天堤さんを紹介したのもアイツだし」

実を言つと来宮の事で揶揄うのが目的だったのだが、それは言わずに子細を話す。

「天堤嬢も可哀想だよなア。引つ掛かったのが市ヶ谷なんて」

「うん」

よくよく考えれば、この事件に橘谷と来宮が噛んだのも市ヶ谷が始まりである。

天才、という不確かな噂で彼女を頼ってきたわけだが、その時の自分の思考がいまだに理解できない。

「今凄く失礼の事考えてないか？」

「そーんな訳ないじゃん、来宮さーん」

「考えてたんだな」

はあ、と息を吐き出せば行き場の無いやるせなさが顔を出す。

「高校生の頭じゃね、限度が有るんじゃないかな……思考能力って」
「何を言うか。私を誰だと思っている」

そうか。

来宮は入学試験を満点でパスした強者だ。

「なんてな。私も所詮十六歳だよ」

「真逆、来宮さんは僕と違って天才じゃないか」

「どうも」

何処か自嘲気味である。下らないとでも言う様な。

「君は努力の人なんだろうな」

「僕？ 努力してはいるんだけどね……いまいち中途半端」

「十位以内に入れても三位以内に入れないタイプだな」

「冷静に分析しないでよ……」

橘谷は鞆を机にのせ、むすっとした。しかし、実際優秀な上二人の兄と姉に負けじと勉強に励んで来たのは本当である。来宮は天才である。

「秀才だ。そう、橘谷君は秀才と天才の違いを答えられるか？」

「できるけど……何で」

「家の間拔けた兄がね」

来宮は橘谷に兄のことを話していないことを思い出し、言葉を切った。そして、兄について軽く説明する。

「えーっと、今二十二歳で大学を出たばかりの兄がいるんだ。もう社会人だな」

「お兄さんいるんだ」

「ああ『間拔けた』な」

「……はは……」

「ほら。秀才と天才の違い」

橘谷は来宮の兄の話に意識が移って忘れるところだった。

「天才は天性、秀才は努力。これが一番簡潔だね」

「矢張りそうだろう？ 天才と秀才は同義語ではないよな」

「うん。類義語ではあるけど」

どちらも頭の良い人を指す言葉。いきなりなんだ、というばかりの橘谷の視線を振り切る様に来宮は頭をふった。

「失敬、気になっただけさ。市ヶ谷の野郎は何か言ってたか？」

「うん……。二度目だからね、あいつは何も知らないって。そもそも話を聞いたのもナンパだし……」

「役に立たんなあ……」

市ヶ谷は来宮の中で最低ランクに位置付けられたらしい。日に日に言い様が酷くなつて来ている。

「そつか…、解った」

「来宮さんは？」

「収穫は零。天堤嬢も休みだ」

「そつか」

やる事がなくなり、二人とも手持ち無沙汰になる。沈黙が暫く続いた後、徐に扉が開いた。二人とも思わず顔を向ける。

「やあ」

其処に居たのは教育実習生の幹野だった。来宮はあからさまに嫌悪感を顔に出し、橘谷はそれに気付き苦笑を漏らした。

「青春真っ直中だったかな」

「馬鹿な事言うくらいなら今直ぐ一遍誰かに殴られて来い」

「わー怖い」

「ちっ」

幹野は動じること無くずかずかと室内に入って、橘谷の隣りに腰を下ろした。

「やあ橘谷少年」

「ど、どうしたんですか。御機嫌ですね。というか“少年”ってなんだよ……」

後半は聞こえないぐらい小さな声で付け足した。今までにない呼称だった。

「御機嫌？ 馬鹿言わないでくれよ。不機嫌も超不機嫌」

今まで顔に張り付いてた笑顔がぺらりと剥がれた様に、不機嫌な表情になった。橘谷は自分が原因と言うより、目の前の後輩が原因だな…とか考えながら二人から目を逸らした。

「お前でもそういう顔するんだなあ」

「失礼だな、来宮さん。君、本当可愛いんだからさ、もうちょっと愛想良くしたら？」

「五月蠅い」

「いッ、痛ッ」

橘谷が見えない大テーブルの下で、思い切り来宮は幹野の足を踏み付けた。橘谷は二人を正視して無かったので、幹野の悲鳴の様な声に驚いた。

「え、どうしました」

「いやちよつとね……」

橘谷は来宮に視線で問い掛けるが、ふい、と知らんふりをする。

（まあ、来宮さんが何かしたんだな…）

「あ、あの。幹野先生は何か用があったんで……す……か」

橘谷が違う話題に擦り替えようとするが、幹野と来宮は第二ラウンドを初めてしまっている。

「君、本当痛かったよ？」

「ほう？ 馬鹿でも末端に神経通ってるのか」

「人間は誰でも神経通ってるよ」

「馬鹿は否定しないんだな？」

「それでも教師だよ？ 馬鹿ではない」

「阿呆。人間性精神的に馬鹿と言う事だ」

「失礼だね。俺のヒューマニズムまで否定される覚えはないよ」

「あつはつは。これは失敬。貴方にヒューマニズムなんてあるとは思わなくてね」

橘谷は会話について行けずじつと待つしかないので、鞆から国語の指定課題図書を取りだし、読み始める。桜陸は二か月に一冊指定課題図書が提示され、読書感想文の提出が考查課題となる。桜陸は文系に強い理数系を育てるのが目標なのだ。因みに先月からの課題図書は『変身』。フランツ・カフカの名作である。

「はあ……」

橘谷が十七ページ読み進んだ頃、やっと二人の口喧嘩は一段落したらしい。来宮は涼しい顔で、テーブルに頬杖ついている。幹野は額に軽く汗を浮かべ、一杯一杯冷静を保とうとしている様だった。

橘谷は、ああ軍配は来宮さんに上がったんだな、と冷静に考え、幹

野を少し可哀想だと思った。ちなみに、橘谷の読書スピードは中下である。何回も読み返しながら進むためであるのだが。

「橘谷君。こいつはちつとも可哀想じゃないぞ！」

「ねえ来宮さんて読心術使えるの？」

「何馬鹿を言っている。こいつと同類に為りたいのか。ただそういう顔でこいつを見てたからだ」

「ああ……」

「君はお人好しだからな」

来宮はくつくつと喉を鳴らして笑った。橘谷はちよつと心外だったが、ここ数日の行いを反芻すると確かにお人好しなので、何も言わず大人しくなった。

「橘谷少年は心が優しいだけさ」

「ただのお人好しだ」

「酷いなあ。君に黙って付き合ってやつてる可哀想な先輩に向かつて」

幹野が言い放った言葉に橘谷は少し顔を歪めた。

「僕は好きで付き合ってるので」

橘谷は自分の事を引きずり出され、来宮を悪く言うのは酷く不愉快であった。この発言は幹野はおるか、来宮までも目を見開いた。

「なんで其処で来宮さんが驚くのさ」

「いや……」

来宮は再度、ふい、と橘谷から顔を逸らした。幹野はふうん、と一人何かに納得して腕を組んだ。

「そうそう。幹野先生は何か用があつたんですか」

「ああ、すっかり忘れる所だった」

本当に忘れていた風に幹野は言った。

「昨日事情聴取があつたろ」

来宮も橘谷も何も言わず聞いている。橘谷は本を抑える様に手を膝に置き、来宮は先程の様に頬杖をついている。

「はつきりいつて、俺疑われてるんだよ」

自業自得だ、と小さく来宮が呟いたのは誰も気付かなかった。

「正直、数人引っかけてたからさあ」

「ああ……そういえばそんなこと言ってたっけなあ」

幹野はそれに少し驚いたが、そのまま話を続けた。

「未夏ちゃんも華和ちゃんも……その、ねえ？」

「それは……」

疑われる、と橘谷は来宮の言っていることに再度納得した。

「それがさ、未夏ちゃんは全く相手にされなかったのよ。同好会にまで通ったのに」

肩をすくめ、大げさなアクションをつける。

「逆効果だろ」

「五月蠅いな。でさ、華和ちゃんは逆に困ってたのよ」

幹野は後頭部を掻いて溜息を吐く。

「凄く本気にしちゃって」

「よかったじゃないか。というかみんな知ってる」

「なんだよ。彼女の家って結構有名な財閥だろ？ 後々の事まで話が及ぶと困る訳」

来宮は顔に『馬鹿だな』と書いてあるような顔で幹野を見ている。橘谷はすっかり混乱し考える顔になって、一言も喋らない。“結構有名な財閥”とは一体何のことだ。

「で、適当にあしらって、未夏ちゃんをずっと口説いていたんだけど……。其処を華和ちゃんに見られちゃってさ。だから未夏ちゃんと華和ちゃん少しずつ仲悪くなってるし、未夏ちゃんの幼馴染とかいう、あの新聞部の部長、榮戸君」

橘谷はやはり部長の名が出ると狼狽えてしまう。

「榮戸君が、『未夏に付纏うのは止めてくれ』って言って来てね。もう一杯一杯だよ」

幹野は何度目かの溜息を吐く。首を何度か振った。

「何が言いたい」

「結論？ そうだね。天堤華和と小波未夏は確執が少なからずあつ

たつてこと」

橘谷はもう何も言う気配がない。来宮はテーブルを見つめている。
「華和ちゃんが犯人の可能性があるねえ」

第六章 不可能の可能性

約五分間誰も何も言わなかった。突飛な発言である。来宮はただただ呆れている。

「えーっと」

「女同士は怖いからねエ。ホラーだよ」

「天堤さんが」

「違う」

来宮はきつぱりと否定した。幹野は少しむっとした顔になるが、やはり冷静を装う。

「物理的に無理だ。体格身長性格から鑑みても、天堤嬢に小波嬢を殺るのは無理だ」

刺し傷は左胸上部、上から刺している。よって、警察の言った通り、犯人は小波より背の高い人物。

「よって、怪しいのは君と三年の榮戸敬。この二人だ」

「だから」

「消去法で矢張りあんたが犯人だ！」

「いやいやいや、待ってよ。動機は？ 動機はなんだよ」

「自分の胸に手を当てて考えろ」

しかし、来宮がここまでぼろに言っていると言う事は、実際違うのだろう。橘谷は聞いてて引っ掛かった。本当に、背が高いだけが決め手に為るのだろうか。そして思い当たってしまったもう一つの方法。

「人間、殺意さえあれば」

「どうした橘谷君」

「ほら吉田刑事が言っていたじゃないか」

まあ人間、殺意さえあれば体格も超えて不可能な犯罪も犯せますからね。

確かである。憎悪、殺意の類いは感情の中で一番厄介である。普

段何よりも抑え付けられるため、膨れ出すと止まらない。

「君は天堤犯人説を肯定するのか？」

橘谷は解っていた。来宮が言うなら天堤ではないのだろう。橘谷が思い当たった考えをとくに来宮は気付いているのだ。それなら尚更、橘谷は無理矢理にでも犯人を。

「しかし、まあ……。これで人間関係がはつきりしたな」

「榮戸部長と小波さんは幼馴染。天堤さんと小波さんには確執があった。幹野先生は天堤さんに本気になられて困っていた。榮戸部長は幹野先生に敵対心がある。そして、幹野先生は小波さんに振られた」

「なんか橘谷少年、来宮さんに似てきた？」

幹野は橘谷を横目に見ながら眉根を顰めた。橘谷はそれを無視して、頭の中を整理する。そこでふと気付いた。

「足りない」

もう一度出てきた名前を頭の中で反芻する。

天堤、小波、榮戸、幹野。

「多村先生がまったく噛んでない」

「そうだな。完全ノーマークだ。今日も昨日も普通に授業をしていた」

「二年生もだ」

（でも、あの時なんで榮戸部長といたんだろう）

小波を発見した際、その場には前に挙げた四人と、この多村という教師がいた。

「あの人さ、未夏ちゃんの伯母なんだよ」

「知ってます。だけど幹野先生、なんでそんな事知ってるんですか？」

「古典同好会の顧問、多村先生だろ？ 伊達に足繁く通ってないし、華和ちゃんも教えてくれたし」

髪を指先で弄りながらさも何でもない様に言った。

「ふうん。インフォーマントは女生徒か」

来宮が嫌味たっぷり横からはいつてきた。幹野も負けじと何か言おうとするが、諦めたらしい。それが賢明である。ちらりと見やり、肺に溜まった空気を吐きだした。

「まあ、未夏ちゃんと多村先生は仲良かったけどね。俺はあまりよく思われて無かったけど」

「だろうなあ。お前みたいの多村教諭が一番嫌いなタイプだろ」

「俺も嫌いだね。多村先生は根っからの文系。俺は根っからの理数系。合わないんだよ」

「そういえば先生。今年新任ですよ？ しかも新卒採用。でも新聞部の資料では二十三歳になってましたよ？ 誕生日は過ぎてませんから、可笑いですよね」

幹野は諸事情で卒業が一年遅いのだ。それは誰も知らなかった。

新聞部には各部門にそれなりのコネクションなりインフォーマント：情報収集元がある。橘谷はコネクションやインフォーマントこそないものの、それなりの信用を勝ち取っているので情報収集力は部内でも高い方である。現在は専ら生徒会情報誌と化しているので、なんとか其処から脱するべく右往左往している。その情報収集力の御蔭で新聞部には生徒、教師、用務員までの個人情報を一揃えにデータベースが構築されている。それは顧問の御蔭でもある。しかし、深い事情までは無理だ。

「桜陸の新聞部ってさ。なんでもあるの？ 教師の個人情報も生徒の個人情報も？」

「ええ、一応」

「じゃあさ」

幹野がごそこそ橘谷の耳うちをしようとする、橘谷はニッコリ笑って牽制し言った。

「スリーサイズはありませんからね？」

「なんだ……ッ痛い！」

幹野は先程と同じ様に来宮に足を踏まれ声を上げる。橘谷は完璧に知らんぷりをした。

「なんで二十三歳？」

「うーん。詳しくは言いたくないな、面倒だし」

「怪しい」

「五月蠅いよ。別に遊んでいたわけじゃない」

来宮のにやりと笑った顔を軽く睨み付けた。動じる事なく、来宮は手をパキと鳴らした。橘谷はそれが妙に怖かった。

「そうなんですか」

「意外？」

「いいえ」

橘谷はきっぱりと言った。幹野はやはり大袈裟に傷ついたふりをする。

「何か酷いなあ。あ、これから職員会議だから。じゃあね、来宮さんに橘谷少年」

そういつてガタリと立ち上がり、そうそうに部屋を出て行った。

来宮は一際大きな溜め息を漏らした。橘谷は両肩にのし掛かる疲労感を必死に振り払った。

「あいつと話すと疲れる」

「あはは…」

「そういえば、吉田君にアリバイ確認後の連絡をもらう様に言うの忘れたな…」

来宮は携帯を取り出した。

「そもそも、あの巨人兵氣に入らん。まあ、もう下手な事は言わないと思うがな？」

（なんか今日益々怖くないか）

勿論幹野の訪問がすべての元凶なんだが。

「多村先生と榮戸部長はなんで一緒に居たんだ」

「全て推測だが」

来宮は自分の鞆を引き寄せ、ごそごそと探りながら言った。

「多村教諭は小波嬢の伯母。榮戸は小波嬢の幼馴染。幹野が小波嬢に手を出している事を、校内にいる親族に相談してたんじゃないか。

幼馴染なら家族ぐるみの付き合いにもなるう」

「そっか。そうだね」

橘谷はやはり何か釈然としない。それなりの情報量もあるが、決め手となる情報は皆無だ。全て疑惑の段階から昇格しない。

「おおあつた、名刺」

来宮が手にしていたのは吉田の名刺。其処に書かれた番号を携帯でブッシュしていく。すぐに呼び出し音が流れ、一拍遅れて、廊下で着信音が鳴った。

「は？」

「矢張りな。先程からゆらゆら影が見えた。幹野とは擦れ違いか」
きつと遠い方の階段から降りて来たのだらう。

「ばっか、切つとけよ」

「痛ッ。すみません…」

「とつとと出る」

「すみません。はい」

廊下で下町と吉田は突然の着信音に動揺していた。吉田は殴られた頭を擦りながら電話にでる。

「やあ吉田君。とつとと巨人兵を連れて入ってきたまえ」

「げ、女子高生」

思わず下町が漏らした瞬間がらりと勢いよく扉が開き、来宮がここにこしながら立っていた。

「御機嫌いかが？ 覗き趣味の刑事さん」

「ええッ、光喜さんそんな趣味が…っ痛いッ！」

「女子高生、それはちよつと語弊があるぞ。決して俺は覗いてない。入るタイミングを見計らってたただけだ」

「本当言つと来宮さんに会いたくな……ぐふッ」

脇腹を殴られ、悶える吉田を横目に来宮と下町が今度は覗きについで、の妙に熱いディスカッションが開始されようとした時、橘谷が割って入る。

「ほら、中入って喋りましょうよ…。吉田刑事……大丈夫ですか？」

「あ、ありがとうございます……。なんか大丈夫って久々に聞きました……」

遠い目をして吉田が言ったのは、こんな目に遭わせている当の二人には聞えなかった。

さっさと中に入り、相変わらず言い合いを続けるそれぞれの相方を見つめ、溜め息を吐いた。

「お互い苦労しますね……」

「ええ……」

はあ、ともう一度溜め息を吐くと、来宮がこっちに訝しげな視線を向けた。

「何してるんだ。早く座れ」

来宮の向かいに下町、隣りには橘谷は腰を下ろし、橘谷の向かいで下町の隣りに吉田は腰を下ろした。化学実験室に、大の大人二人が座って居るのは少し可笑しい光景だ。

「えーと。アリの確認が全て完了しました」

「全員白だ。供述通り」

「流石に数分トイレや一人に為る時間はありますが……」

桜陸か前に説明した様に、広いのだ。

「犯行可能な程一人には為っていません。多村慧子は同好会の歓迎会出席後、一年職員会議により退出。これは他の先生方にも同好会の生徒にも確認とれてます。幹野朔也はこの部屋にいた事も職員会議に出てた事も貴方方と先生方が確認してもらってますから」

「不本意だがな」

来宮は心底嫌そうに言った。

「それで榮戸敬ですが、新聞部の確か」

「企画会議です」

橘谷は当分休むと連絡をしているので、関係は無い。企画会議は定例なので知っていた。

「そうです。企画会議中一度退出。五分程で帰って来てます。その後、後輩の……葛川という生徒の使うカッターで怪我をし職員室へ。

其処で害者の伯母である多村慧子と会い、治療序でに幹野朔也について相談していたと」

「少し気になったんだが、なんで職員室なんだ。普通保健室だろ？」

「桜陸は軽い怪我は保健室でなく職員室で治療してしまうんです。

保健室に入り浸る生徒の防止だとか……」

実際そんな人は入学できないが。

「それも確認済みです。天堤華和は多村慧子と同じく同好会の歓迎会。途中、保健室に居たという小波未夏の様子を見に退出」

「どういう事だ？」

来宮が初めて話を止めた。

「保健室に居たっていうのは」

「五時限目……学年総会の途中に体調不良を訴え、保健室に行ったそうです。一人で返す訳にはいかなないので、榮戸の帰宅時間まで休ませるつもりだった様です」

「だから居なかったのか」

来宮は一人ごちた。

「わかった。天堤嬢の続きを」

「で、保健室に行ったら保健医が居ない隙にいらなくなったと」

「居なくなっただ？」

「犯人が連れ出したんだろうと考えている。顔見知りなのは間違いない」

「ええ、まあそれで校内を探していて発見……と」

それが事件発覚である。

「おい巨人兵」

「ていうかな手前。もっと年長者への口の聞き方をだなア」

「年齢よりも地位だろう？」

くつくつと笑った。橘谷は意味が分からなかった。吉田も同じくである。

「わアったよ」

不貞腐れて外方を向いた。来宮はしたり顔でにやにやとしたまま、

吉田に向き直った。

「小波嬢と天堤嬢の關係は聞いたか」

「なんですか？」

（あの馬鹿共。誰も何も喋ってないのか……）

来宮は内心毒づきながら、吉田に確執についての話を始めた。

「天堤華和と小波未夏に確執があつた？ 初日の話がやはり本当だつたんだ」

「ああ。しかし、この登場人物の中に天堤の味方は居ない。殺るなら自分で殺るしかない」

「物理的に無理ですね」

一同沈黙。誰も話をしなくなった。

「えっと。光喜さん」

「あア？」

「いい歳して不貞腐れなさいよう。どうします？ 天堤華和を一度呼び出します？ 聴取じゃ憔悴し切って何も聞けなかったじゃないですか」

「いや……」

「その必要も無いだろう」

来宮は下町が言い切る前に来宮が遮った。

「まあつたく。今日は大繁盛だな」

「すみません。立ち聞きするつもりは無かつたんですが」

入口には天堤が立っていた。

「天堤さん。入つてよ」

入口から離れようとしないうちに天堤を橘谷は呼び入れた。天堤はやつと歩を進め入って来る。橘谷は席を立ち、天堤に勧める。

「宜しいんですか？」

「どうぞ」

「失礼します」

そういつて席に着いた。橘谷はそのまま隣のテーブルに寄り掛かった。

「この間はどうも」

吉田が軽く会釈をして、手帳をぱらぱらとめくる。

「あのう……単刀直入に聞きますね。小波未夏とは、あの、その……いだッ」

「全然単刀直入じゃねえよ。天堤さんよ、あんたは害者と確執があったのは本当か？」

「え……と……その……」

「巨人兵！ 女になんて口を利く！」

「あア？ ……いえ何でもないです」

来宮は立ち上がり無言で下町を見下ろしていた。橘谷と天堤には見えなかったが、だいぶ怖い顔である。

「良いか？ お前が聞くと話す事が有っても嫌になるからな。全部吉田君経由で質問しろ」

「あの……すみません。来宮……さん？ ありがとうございます」

ボブにした髪が、頭を下げる度にさらりと流れた。育ちの良さが漂っている。

「私がハッキリしないのがいけないのです。ハッキリ言いますわ。」

私は未夏が嫌いでした」

キツパリと断言した。心なしか瞳が揺れている。総じて何も言えない。

「でも……、殺すなんてとても……」

最後は殆ど聞えない様な声だった。少し掠れているのは、やはり悲しいのだろう。

「あの、何でだか教えていただけますか……？」

「はい。先生、朔也先生の事で……」

天堤は幹野を『朔也』と呼んだ。

「私にとっても好くして下さったんです。私、凄く嬉しくて……。私は家の事もあって、あまり男性と縁がないのです」

俯きがちに淡々と話し始める。橘谷は、本当に嬉しかったんだろう、と思った。

「家の事？」

「ああ、そうですね」

吉田は知っている様だ。来宮も無論である。橘谷と下町は思わず顔を見合わせてしまった。

「おい。どういう事だ」

「光喜さん、覚えてないですか？ あ、居なかったんでしたね……」
「何だよ！」

吉田の胸倉を掴みぐらぐらと揺する。橘谷は止めようにも来宮と天堤が壁になつてるので間にも入れない。

「ちょ、ちよつと、光喜さん、はな、離して下さい……、話しますから！」

やっと開放された吉田は、数回咳き込むとネクタイを直しながらぶつぶつ言つて座り直した。

「天堤さんのお祖父さまは、あの帝グループの総裁でいらっしゃるんですよ」

「へ？」

「え、本当？」

橘谷も下町も聞き覚えがあつた。帝グループとは、主に食品関係をメインとし、レストラン経営や食品宅配サービスなどを行っている。天堤家は関東御三家の内の一つである。

「御三家……のお嬢様だったんだ」

「ええ天堤家の者でございます」

橘谷はただただ素直に感心した。というより、何故桜陸に通っているのか疑問であつた。

「しかし、光喜さんちゃんと捜査会議でくださいよう。僕が叶さんにどやされるんですから……」

下町と吉田の所属する捜査一課の課長である叶和哉は署内でも一二を争う程怖い。どう怖いときかれても困るくらい、文字どおり怖い。

「う……。ほら、話の続きだ。で？ 天堤さんはどうして嫌いなん

だっけ？」

無理矢理話を元に戻した。

「私、恥ずかしいんですけど……その……朔也先生がす、すすす」
頬を軽く上気させて、天堤は居心地悪そうに視線を泳がせた。

「そうか、わかった。言わずとも解るからな。続けて」

見かねた来宮が先を促す。

「それが……。朔也先生は未夏にも手を出してて」

俯いたまま、話す。誰も茶茶はいれない。

「私、悔しくて。未夏は幼馴染の榮戸っていう先輩が好きで断っていたんですけど。未夏はその榮戸先輩にも朔也先生にも、色んな人に愛されて……。要はただの嫉妬なんです。何度自己嫌悪に陥ったか判りません……」

来宮は、何を思ってるのか、テーブルを見つめている。幹野にたいて毒を吐く事すらしない。橘谷は何を話していいかもわからず黙ったままだ。吉田は手帳に何かを書き込んでいる。下町は腕を組んで天井を見上げている。

「わかりました。辛い話をさせてしまつて申し訳ないです」

「いえ。事実ですし。隠す様な事ではありませんから」

弱々しく笑った顔が、本当に哀しそうだった。

「んじゃあ、帰りますか？ 光喜さん」

「おう。女子高生、なんかあつたら吉田に連絡しろよ」

「あつたらな巨人兵」

「きよ……。橘谷君だったか、本当頑張れよ」

「どういう意味だ。とつとと失せるッ」

へっへっ、と笑った下町と吉田は会釈だけして帰っていった。

「頑張ります」

「君までなんだ」

「冗談だよ。天堤さん、大丈夫？」

俯きがちのまま、凝乎つと黙っている。来宮は困った様に笑ったあと、天堤の肩にそつと触れた。

「大丈夫だ。何とかなるさ、天堤さん」

橘谷は来宮が人に『さん』を付けて話すのを初めてきいた。

「あれからもまったく泣いて無いだろう」

「え？」

天堤は思わず顔を上げた。泣きそうな顔はしているが、眼は全く腫れていない。来宮は腕を組んで「そうだろう」と言った。橘谷は何もいわず二人を見ている。

「だってきつと、止まらないから。止めてくれる人が居なくなってしまうから」

嫉妬をしても、嫌いといつても、天堤にとっては大事な親友だったのだろう。家柄の所為で近づく人が少なく、両親も祖父母も忙しくて相手にされない、寂しい思いをしていた天堤にとって小波は恋敵なだけで、大事な親友だったのだ。

「ずっと泣きたかった筈だ。泣け。思う存分泣け。今なら私も橘谷君もいる。いつそ涙が涸れるまで泣いてしまえ」

橘谷は無言で天堤の視線に頷いた。来宮はぽんと肩を叩いた。

放課後の化学実験室には、長い間天堤の泣き声が響いていた。来宮にしがみついて嗚咽を漏らす天堤を橘谷は黙ってずっと見守っていた。

第七章 論より証拠

夕方。何時かの喫茶店Kに来宮、橘谷、天堤がいた。天堤は眼を赤く晴らしながらも泣きやんでいた。三人の前には三つの珈琲。天堤は砂糖を少量入れている。

「すみませんでした。御恥ずかしい」

「構わん。橘谷君、変な顔だ」

橘谷は改めて天堤と来宮を並べて見ると、壮観なのに気付いた。二人共美人というか端正である。市ヶ谷が知ったら金魚の糞の様に付き纏われるだろう。それを呆つと見て居たら、口を少しだけ開けたなんとも可笑しな顔になっていたのだ。

「え？ あ、ごめん」

ふるふるとかぶりをふつて、ブラックの珈琲を飲み込んだ。

「それにしても、天堤さんて帝グループ総裁の御孫さんだったなんてね。名前が違うから判らなかったよ」

「なるべく話さない様にしてましたから。天堤では字数が善くないと言われたそうですわ」

「豪華な名前なのにね」

橘谷は特に意図も無く、言った。すると来宮と天堤が合わせた様に吹き出した。

「君、可笑しな事言うなア」

「私初めてですわ、そんな事言われたの……」

来宮も天堤も口に手をあて、くすくすと笑っている。橘谷は急に恥ずかしくなって珈琲をがぶりと飲んだ。口内に苦みが広がる。

「うるさいな……」

「まあ、確かに豪華だがな」

（馬鹿にしてるな……）

橘谷はむっとして、珈琲を飲み干した。

「帝は、祖父の名前なんです」

天堤帝。その昔財閥体制の世の中、天帝と畏れられた日本経済界のリーダー的存在である。今では関東御三家の二番手である帝グループだが、経営に天帝が絡んでくることはない。最高総裁の肩書だけの存在になりつつある。事実、この間学校に迎えに来ていたのが天帝ということになる。

「なあ」

「何か？」

来宮は、む、と腕を組んで唸った。

「天堤さん」

「華和で構いませんわ」

「華和君」

来宮は順応が異常に早かった。橘谷は来宮の短い期間だが『さん』付けが聞けて少し楽しかった。

「あんな後に悪いが」

「何でも聞いて下さって構いませんわ」

天堤はにこりと上品に笑うと、珈琲を一口飲んだ。

「じゃあ遠慮無く聞くんが、『ケイちゃん』が誰だか判るか？」

橘谷は忘却しかけていた存在を唐突に思い出した。『ケイちゃん』だ。

「ケイちゃん？ ええ、判りますけど」

「え、判るの？」

「なんだ知ってるのか」

「はい」

橘谷は天堤から話を聞いた時、何も聞かなかったため天堤も知らないと思っていた。来宮も橘谷が天堤は知らない風だったので聞きもしなかったのだ。

「橘谷君」

「いやいや、僕も知らないと思ってたから！」

「ふうん。まあいい。華和君、で、それは誰だ」

「榮戸先輩です」

「はあ？」

橘谷は思わず素頓狂な声を上げた。榮戸の名前には『ケイ』は入っていないからだ。来宮はちらりと橘谷をみやったが、すぐに天堤に向き直った。

「昔からそう呼んでいるみたいです。榮戸先輩の下の名前は敬、読みは『タカシ』ですよね？」

「そうだよ」

「小さい頃から、それを『ケイ』と読んでたんですって。ほら、小さい子にはタカシって意外と難しいでしょう？ だから『けーちゃん』と呼んでいた名残みたいですよ」

天堤は珈琲カップを両手で包み込む様に持ってまた一口のんだ。大切な記憶を大事に思い出す様に、小さく微笑んだ。

「そうなる……、榮戸も怪しいなア」

「榮戸先輩が未夏を……？」

「違うよ」

橘谷は断固とした口調で言い放った。彼は犯人ではない。あつてはいけない。

「部長が、そんな事する筈無い」

「それに、未夏を大事にされてたそうですし……」

天堤も橘谷も榮戸犯人説は却下した。来宮は困ったようにわらった。

「いや、そういう意味じゃないんだよ」

来宮は冷えた珈琲をぐくりと飲み込むと、珈琲の香りの溜め息を吐いた。他二人は不思議そうに首をかしげる。

「小波嬢の家に行つて見るか」

来宮はそう言った。

「下町さんとかに怒られるんじゃないの？」

橘谷はあの背の高い刑事を思い浮かべた。隣りにいるひ弱そうな刑事も。

「ふん、橘谷君」

来宮は鼻で笑った。

「私を誰だと思っている。あんな奴に怒られる訳なかるう」
実際何者かは判らないが、その一言で小波未夏の家への訪問が決定した。

言い切った来宮を、天堤が輝く尊敬の眼差しで見ていたのを、橘谷は気の所為だと思ふ事に決めた。

（これ以上来宮さんみたいな娘が増えたら困る）

来宮がじろり、と睨んだのも、気の所為にしかかった。

*

翌日。土曜日で休日である。全員私服。のはずなのだが。橘谷はブルージーンズに白いＴシャツ、黒いジャケットという初めての訪問には差し支えない程度の格好だった。天堤は水色のカッターシャツに黒いワンピース、こちらはやはり上品であった。しかし、何故か来宮はまた制服であった。

「来宮さん……」

「なんだ」

「なんで制服なの？」

来宮は「別に」と、すたすたとタクシー乗り場に歩いて行った。実は少し期待して居たので残念だと橘谷は思った。私服はものすごく興味がある。それは天堤も同じだったようで、二人して同じような視線で来宮を見ていた。

桜陸は長い坂の上に在るのだが、下り切って二十分程歩いた場所にいつもの駅がある。行きはかかるが、帰りは早い。

タクシー乗り場には二台だけタクシーがいた。

「家で車を出せば良かったのですが」

「社会見学でいいんじゃないか」

「お金は私が持ちますわ」

「え？ いいよ、僕が……」

「チケットですから」

そう言つて、来宮が早々と乗ったタクシーに乗り込んだ。

小波未夏の家はそう遠くなかった。二人が歩き慣れてないだけで、橘谷は歩いて行けた。しかも、料金は天堤持ちである。橘谷は男子としてなんとも情けない。お財布の存在をポケットに感じながら、少しばかり嘆いた。

「なに泣いている」

「情けなくてね…」

「何を今更」

「……………」

来宮の一刀両断。橘谷は窓の外を遠い目で眺めていた。もういい加減、慣れてきた気もする。

「はい、ありがとうございます」

タクシーは静かな住宅地の中をエンジンの音と共に消えて行つた。来宮を始め、橘谷、天堤は小波と表札のかかった家の前に立っていた。

玄関には、忌中と書かれた紙が貼つてある。色々な関係で葬式はまだでていない。遺体すらまだ帰つてこないのだ。

天堤がチャイムを押す。すぐに疲れ切つた女性の声が聞こえた。

「御忙しいところ申し訳ありません、天堤です」

すると短い返事のあと、玄関が開いた。天堤が軽く礼をした。

「いらつしゃい、ごめんなさいこんな格好で…」

家から出て来たのは黒髪を襟足で束ね、やつれてはいるが、なかなかの美人であつた。小波の母親である。

「あの、その方達は？」

「初めまして、私達は未夏さんと親しくさせていただいていた者です。私は来宮と申します。こっちは橘谷君」

「初めまして」

勝手に紹介され、思わず礼をした。小波の母は、「そうですか」と快く中にいれてくれた。

嘘を吐いたのが、少しだけ心が痛んだ。

「それじゃあ未夏の……」

「ええ。いずれ御挨拶に来ようと思っていたのですが…突然こんな事に……」

来宮が普段の性格と百八十度違う事に橘谷が戸惑ったが、天堤も上手く合わせている。

来宮はやはり心が痛んだ。娘を亡くした親に嘘を吐いているのだから。しかし、今は仕様が無いと無理やり納得する。

「未夏の部屋、そのままですから。帰る前に見て行って、写真も沢山あるから……。未夏を忘れない様に、持つて行っても構わないわ」途切れ途切れになるのは、天堤と同じ。泣くのを我慢しているからである。娘の友人の前で、なんとか気丈に振る舞おうと必死になっている。

「わかりました」

来宮はそれだけ言って、それ以外は何も言わなかった。

そのあと、三人は小波未夏の部屋にいた。小綺麗な部屋である。アルバムや本が綺麗に棚で整理されていた。天堤は机の上に飾られていた、自分との写真を見つめていた。満開の桜の下、入学式の写真である。

「橘谷君」

「何？」

「君は外にいたまえ」

「え、なんで？」

「君はつくづく察しが悪いというか……勘が鈍いというか……天然というか……」

「わかった。わかりました。外に居ます。ええ」

橘谷はこれ以上言われるのも何なので、外にでた。二階の廊下は少し冷たくて、壁に寄り掛かり凝乎つしていると足の裏がひんやりとした。

来宮が橘谷を外に出したのは、ただ小波も死後に自室へ異性が入

るのは嫌だろうと考えたからだ。橘谷もすぐに思い当たって、廊下へ壁伝いにずるずると座り込んだ。少しすると、小波の母の嗚咽が漏れ聞こえた。橘谷はただ呆っと、その嗚咽を聞いていた。

「橘谷先輩、大丈夫ですか」

天堤が部屋から出て来た。少し目が赤い。

「うん、大丈夫。天堤さん、平気？」

「大丈夫です。いろいろ思い出してしまっただけで」

後ろ手でパタンとドアを閉めると、階下の嗚咽に気付いた。天堤は一瞬悲しげに眉を顰めたが、ゆるゆると頭を振って、廊下に佇んだ。そして、余り時間も開かず、来宮が出て来た。

「待たせたね。行こうか」

まるで嗚咽が止むのを待っていた様なタイミングだった。三人で階下に降り、挨拶もそこそこに帰る旨を伝えた。

「どうか気を落とさないでください……。御葬式の際は、御手伝いに参ります」

天堤が最後に深々と礼をして、呼んでいたらしいタクシーに乗り込み、駅へと戻った。

その間、来宮は始終黙っていた。天堤、橘谷ですら何も言わず、ただ窓の外に広がる嫌味なくらいの青空に目を向けているだけだった。

*

「では、また月曜日に」

天堤は迎えの車で帰った。来宮はそのままタクシーで帰路に就いた。橘谷は、すぐ帰る気になれず、Kに寄る事にした。

橘谷は何よりも来宮の態度が気になっていた。帰り際も、いつも她能弁が見事に途切れていた。

Kにはいり、ブラックの珈琲を一杯頼んだ。店主はよくわからない笑みをはいつてきた橘谷に向ける。その笑みに幾分か見覚えがあ

るのだが思い出せなかった。やはり珈琲は、特別美味しくはなかった。橘谷にはその苦みが、とても悲しげであった。

「人が死ぬのは辛い」

自分の祖父の葬式を思い出した。まだ小学生の橘谷は、大好きだった祖父の死に眼を赤く泣き腫らしていた。沢山の人が悲しむ。死とはそういうものだ。

橘谷は溜め息を吐いた。それは、ある考えに至ったからに、他ならない。

*

来宮はタクシーの中でやり場のないもどかしさを感じていた。背負った鞆が重い。

「死ぬのはいけない」

そうぽつりと呟いたのは、運転手にすら届かなかった。

家につけば、間抜けた兄がいるだろう。来宮は何日母親に会ってないか、少しでもだけ思考してみた。しかし、すぐに止めてしまった。

（下らない。ただの他人だ）

自分に苛立ち、一つ舌打ちをした。

*

日を一日挟み月曜日。今日、小波未夏の通夜が行われる。

全校生徒のタイが指定の赤色ではなく、小波を弔う黒色だった。

誰も、自分の在学中にこのタイを着けるとは思ってもみなかっただろう。

橘谷も黒色のネクタイ、来宮も黒色のリボンタイ。

初めて、全校が深緑と黒のコントラストで一人の死を認識した。それはとても、悲しい事だ。

授業は滞りなく進んだ。ただ、やはり異様なまでの悲哀が静寂と

して構内を満たしていた。誰かが、涙を流した。

夕方、天堤は一足先に斎場へと向かった。橘谷と来宮は幹野の車に便乗して向かう事になった。学校からは代表者のみの参列となった。生徒代表として、橘谷、来宮、榮戸、天堤。橘谷と来宮は榮戸が推したからである。教師代表は多村と幹野、校長と教頭の四人だ。来宮は幹野の車に乗るのは嫌そうだったが、橘谷がなんとか宥め賺して、承諾した。

「混んでるね。ちょっと遠回りになるけど構わない？」

「遅れなきゃいい……」

そう言った来宮の顔は、凄く沈んでいた。幹野でさえふざける事は無かった。来宮の黒いカーディガンが、車内を黒色で充満させる様だった。

「着いたよ」

人は疎らだった。橘谷は、ただ、黒色と白色が目染みた。来宮は香典を渡し、記帳していた。橘谷も同じ事を繰り返す。

式が始まってすぐ、昼間晴れていた空が突然雨を降らせた。

橘谷は参列し、焼香を済ませると、席に着いた。隣りには来宮がいて、その向こうに天堤がいた。反対側には榮戸が座っている。幹野を始め、多村以外の教師は橘谷達の前に座っていた。多村は親族の席に座っている。橘谷は驚いた。酷い言い様かもしれないが、あの来宮が泣いていた。何故か遺影を、笑っている綺麗な顔を、思い切り睨み付けながら。橘谷は、今誰よりも痛々しい、来宮から目を逸らした。

斎場からは小さく桜陸の校舎が見えた。まだぼつぽつと明かりがついている。

式の後、早々に来宮、橘谷、幹野は引き上げることにした。帰り、黒色のネクタイを結んだ下町と吉田に会った。

「おう、女子高生。容疑者候補と御帰りか」

「光喜さん……。苛々するのやめてくださいよう……」

「うるせい」

下町はふん、と子供の様に拗ねるとすたこらと斎場に姿を消した。吉田は溜め息を吐いて、来宮や橘谷に向いた。

「すみません、許してやってください。犯人、判らなくて苛ついてるんです。あの人はああで実は正義感が強いですから。じゃあ、失礼します……って、うがッ」

来宮が襟をむんずと掴み、吉田を引き止めた。そのまま橘谷と幹野に言い放った。

「私はタクシーで帰る。橘谷君、また明日な」

橘谷はよく事情が飲み込めない儘、幹野に駅まで送ってもらう事にし、車に乗り込んだ。

「なんですか、ツげほ……」

「気になる事がある」

橘谷は次の日、自分の耳を疑う事となる。

*

「華和ちゃん」

暗い所だった。

「ごめんなさい、華和ちゃん」

声が響く。小波の声だ。

「私ね、もう」

そこで声が終わった。天堤はそれが夢だった事に気付いた。月明りが入る部屋、汗をタオルで拭った。

「誰か」

人を呼ぼうとして止めた。内線電話に伸ばした手を引っ込めた。

天堤は薄々、犯人に気付いていた。それを認めたくなくて、思い切り布団をかぶった。空には暗雲が立ち込めていた。

机の中には一通の封筒がある。天堤は明日、来宮に渡す事を決意した。

ごめんなさい。もう、堪えられないわ。

殺される、と言った言葉の虚実。既にわかりきった真実。誰も気付かない、言葉。

もう、すべて終わっているのだ。

*

朝から雨であった。桜陸は昨日に引き続き、生徒全員が喪に服していた。生徒代表は告別式の間のみ公欠として告別式へと参列する。教師代表もまた然りである。

午後零時。長い長い、クラクションが町内に響いた。

さらにその二時間後。茶毘所の細い煙突から、白い煙が青空に還っていった。

*

昨日の夜。吉田は来宮から伝えられた話を下町に伝えた。すると、かえって来たのは短い舌打ちと予想外の答えだった。

解っていた。解って……ああ、畜生。

吉田は、問い質そうと背中を向けて煙草をふかす下町の肩を掴んだ。振り返った顔は、今まで吉田の見た事のない辛そうな顔だった。思わず手を放した。

「すみません」

「謝んな」

煙草を灰皿にぎゅうぎゅう押しつけた。紫煙がふわりと虚空へ溶けた。

「あの女子高生の事だ。最初から気付いたんだ」

「最初から？」

「あの橘谷とやらも、薄々勘付いてる筈だ」

後頭部をがりがりとはツが悪そうに掻いた。

「御三家のお嬢さん“方”はどうだかな。女子高生　来宮市松と

橘谷龍だけが確実に頭にある筈だ」

吉田は黙りこくった。息苦しさを感じネクタイを緩めた。あまり変わらない。下町も同様に息苦しさを感じ、大きく息を吐き出した。「高校生には、余りに酷かもしれない。俺達大人だって辛いんだ」

「はい」
署内は人の声でこった返していた。今回の事件は幸い、公共に発表される事は無かった。

「ああ、嫌だな。仕様が無い、学校行け。あいつら、学校戻るんだろ」

「六時限目のみ出るらしいですから、きつとまたあの部屋にいるかと」

下町はもう一度舌打ちをすると、上着を羽織った。すると、課長である葉が喫煙室を覗いた。

「葉さん。どうかしましたか」

吉田が立ち上がった。葉はいいや、と手をひらひらと振った。

「あんた等も酷な事件の担当だな」

「ええ」

「というかごめんなさい、ちょっといいですか。課長まで解ってたんですか？　もしかして僕だけ？　解ってなかったの」

「はっはっ、新人なんつうのはそんなもんだ。精々、気張ってこいよ」

葉は自分の煙草を取りだし火をつける。下町はそれから、何も言わずに吉田を引き連れて喫煙室を後にした。

これ程、酷な事件は久々だ。下町は胸中で、悪態をついた。

第八章 桜の花ほど脆弱で

十年近く前。それはもう色褪せてしまった想いだった。何故かふと思いつく事があり、郷愁の念に駆られる。

頭をゆるゆると窓の外に向けると、葉桜の枝がゆらりゆらりと揺れていた。それはまるで自分の思考を具現化されたようで不愉快だった。

『ケイちゃん』

そう呼ぶ声が、頭から消えてくれない。それは、消す為の記憶だ。

*

しゅるり、と昨日は黒色のリボンタイを外した。黒いカーディガンも羽織っていない。替わりにボレロを羽織り、シャツの第一ボタンを開けている。

「疲れた」

来宮は小波の家に行ってから機嫌が悪い。明らかに刺々しい雰囲気纏っている。橘谷は特に自分から触れる事はなく、六時限目が終わり次第、此处、化学実験室に来ていた。

「橘谷君」

「何？」

「君は人の死が、どれだけの人を辛くさせるか…解るな」

来宮は語尾を強めて聞いた。橘谷はきよんとするも、すぐに頷いた。

「解るさ」

「解らないのは」

来宮は其処で切ったまま話を止めた。扉が開いた。其処には下町と吉田が立っている。

「解んねエのは大馬鹿野郎だ」

「そうだ。珍しく気が合ったな」

「ちつとも嬉かねエよ」

ふん、と鼻で自嘲気味に笑う。吉田は斜め後ろで暗い顔をしていた。橘谷は何がなんだか解らずに、ひとりきよろきよると拳動不審になった。

「女子高生。何時から気付いてた」

「最初から……いや、幹野の話を聞いたあたりからだ。話が可笑し過ぎる」

下町も来宮もそれで意思の疎通が図れた様だ。橘谷は俯く吉田を見、下町を見て、来宮を見た。三者とも一様に喋らない。橘谷は観念した様に肩を竦めた。すると、この雰囲気壊す様に幹野の声が入ってくる。幹野は喪服のネクタイを外し、黒いスラックスに白いシャツと今までで一番教師らしい格好をしていた。

「お、御取り込み中？」

「間の悪い男だな。まだ間の抜けた奴のがました」

「帰りまーす……」

「ああ、幹野先生待つて下さい」

「何か？」

幹野は回れ右をした体をさらに回れ右で元に戻った。橘谷はこの雰囲気一人にいるのは堪えられない。

「先生は邪魔なんてしませんよね？　ね？　ほらどうぞ。入って、下さい」

「あ、ああ」

橘谷が語調を強くして半ば無理やり席に座らせた。来宮は小さく溜め息を吐いたが、文句は言わなかった。

「女子高生」

「何だ」

「証拠は」

「無い」

来宮と下町の声は、湿った広い教室に好く響いた。橘谷と幹野は

後列廊下側の大テーブルに座り、下町と来宮は前列中央に向かい合
つて座り、吉田は前列廊下側、橘谷の目の前に座った。この雰囲気
は異様だった。

「じゃあ何故言い切れる」

「根拠はある」

来宮が鞆から取り出したのは、二つに裂かれた写真。写っている
のは、小学生くらいの男女だ。橘谷達の場所からは確認する事が出
来ない。

「もつと確たる証拠が必要だ」

「しかし、これがその選択肢の正解率を上げた」

「確かに」

来宮はその写真を封筒にいれ、下町に渡した。下町はそのまま吉
田に回す。吉田はその写真を確認する。

「この娘」

そこに写っていたのは、小波未夏と榮戸敬だった。

「しかし来宮さん。これなんで」

「家に行った」

しれっと来宮がいう。それを聞き流すところだった下町が声を上げ
る。

「そうか……、ツて行くな！」

「ふん。お前等が行かないから行ったまでだ」

来宮はしたり顔でふふんと嘲った。下町は浮き掛けた腰を再度椅
子に着ける。そう、行っていないのだ。警察は小波の家に。

「しかし」

「本人から何も聞かなかったのか？」

「今回、皆が皆何も言わなかった。あそこの教師以外」

「俺？」

下町は幹野を差した指を米噛みにあて、唸った。

「誰もが、『心当たり』が有ったんだ」

「榮戸敬にも多村慧子にもか」

「勿論、天堤華和にも」

吉田は兎も角、幹野と橘谷は全く話が読めない。反して下町と来宮は真相が解っていた。

「しかし。キツいな」

「ああ。華和君が堪えられるかどうか」

来宮は髪を長い指に絡ませながら、何度目かの溜め息を吐く。此処数日、此の部屋の人物は溜め息ばかり吐いている。外の空が、ふらりと雨雲を造った。夕立がコンクリートの校舎を叩く。

「ああいけない。雨が」

吉田は傘を持って来てない事を思い出した。職員駐車場に止めるのが面倒臭いと、脇の道路に止めたのがいけなかった。車まで幾らかかかる。校舎が広いということは、敷地も広いのだ。

「構うか。どうせ、直ぐに止む」

「なら、いいですが」

吉田は口を噤んだ。空気が張り詰めている。

「なあなあ橘谷少年」

こそこそと幹野は橘谷に耳打ちした。

「なんですか……」

「俺、帰っちゃ」

「駄目です……ッ。このタイミングで一人にしないで下さい……ッ」

こそこそと掠れた声で会話をする。

「俺もう耐えられないよ……ッ」

「僕だって。教師なら教師らしく」

「まだ新任だから……ッ」

「こんな時ばかり……ッ。ていうかそれ威張れませんから」

「五月蠅いよ」

「新任だって教師は教師でしょうが」

そう橘谷がいった時。来宮が唐突に話を振った。

「橘谷君」

「ごめんなさいッ!」

「何謝つてる。さつきからこそそと…。馬鹿が移るぞ」

「大丈夫。抗体が出来たから」

傍らに座る幹野もお構いなしにいう。

「あ、酷い」

「五月蠅いです。あ、で何来宮さん？」

「榮戸でも天堤でも誰かしら掴まえて来てくれ。関係者を」

「はあ…」

「一人だけだぞ。解つたな」

橘谷は釈然としたまま、部屋を出ていった。幹野はタイミングを逃して、一人で残る羽目になる。

（くそう、裏切つたな橘谷少年……）

幹野がそう思っていると、来宮がふと哀しそうな顔をした。

「彼にも酷かもしれないな」

「橘谷龍か」

「彼は、信じようとしていない。自分で気付いた事象に」

来宮はそう言つて唇を噛んだ。下町は吉田に車を回しておく様に行つた。幹野はいまいち把握しきれない。

「しかしなア……。何で」

「俺には解らない」

「解つて堪るか…」

来宮は低い声でぼつりと言つた。外の雨音で、綺麗に掻き消された。

*

橘谷は思わず幹野を置いて来てしまったことに気付いた。間の悪い幹野の事だと、なかなか出れずにいるだろう。しかし、三階に上がった時点で気付いたのだから、もう致し方ない。

廊下から外を覗くと、雨の中にぼつりぼつりと電燈の仄かな明かりが浮かんでいた。散つた桜が張り付いて、地を桜色に染めていた。

「同好会の部屋には流石に居ないか…」

橘谷は一番遠いこの部屋から回ろうと思ったのだ。古典同好会の部屋の扉に手を掛けると、案の定がちゃがちゃと煩く鳴るだけが開かなかった。次はそのまま降りて新聞部の部室である。橘谷は久方振りだと思った。たった二三日しか休んではない。しかし、色々あり過ぎた。

（皆、居ないな）

新聞部が全員集まるのは企画会議の時だけである。後は学期末の予算決済だけだ。しかし、部室はがらりと戸を開けた。まだ誰かが荷物を置いているのだろうか。暗い部屋。窓からはゆらりゆらり、桜の枝が揺れているのが窺える。

隣の部屋に人影があった。明りはついていない。

「誰かいるの？」

がちやり、とドアノブを捻る。ドアは難なく開いた。そこには、

榮戸がいた。

「部長」

「橘谷か」

榮戸はパイプ椅子に深く腰掛け、窓の外を眺めていた。橘谷の方を一瞥すると、すぐに視線を窓の外に戻した。

「捜していたんです」

「俺をか」

「ええ。一年の来宮と、警察の下町さんが」

橘谷は、暗い部屋の電気をつけた。二三回点滅して、蛍光灯がついた。

「行きましょう」

「ああ、すまない。先に行ってくれ。後からすぐに行くから。場所は」

「B棟一階の、化学実験室です」

「すまない」

榮戸はそれだけ言った。橘谷もなにも言わず、部屋を後にした。

廊下に出ると、ひんやりとした空気が頬を撫ぜた。橘谷は雨音の聞こえる廊下を、歩き始めた。部活動は各部とも自粛、という形で今日は休みである。なにより、やる気が起きないのだろう。B棟が一時閉鎖になった所為で生徒がC棟からA棟に移動出来なくなった為、必然的に校内部活の生徒は休みにした様だ。もちろん、一度外に出て、大回りで職員玄関から出入りは出来る。しかし、わざわざする必要も無く、教師のみがその方法をとっていた。

学校が休みになることは無かった。

（真面目な学校だよ、本当）

橘谷は三年生の受験対策用のカリキュラムを聞いた事があった。壮絶の一言に尽きる。しかし、それを難なくこなしている先輩達を本当に凄いと思った。

「橘谷さん」

「あ、吉田さん。どうしました」

橘谷が化学実験室に戻る道を歩いていると、吉田に出くわした。

「車を回してこようと」

「ああ。凄い雨ですからね。傘、ありますよ？ 職員玄関の傘立てに予備の傘が幾つか入ってる筈です」

生徒が忘れたりした場合の予備の傘だ。常時置いてある。

「そうなんですか…。てつきり先生方の傘だとばかり」

「先生達、私物は全て更衣室にあるんですよ」

「わかりました。借りていきます。ありがとうございます」

そう言つて、吉田は足早に通り過ぎた。橘谷も、少し足早に、廊下を歩いた。足音が五月蠅い。誰も居ない所為だろうか。

これが独りと言っのだろうか。

橘谷はふと考えた。しかし、こんなもの「独り」とは言えないな、と苦笑した。ただ「一人」なだけだ。

一層、雨が強くなった。遅咲きの八重桜の、何処かの枝がパキリと折れて落ちた。

「ただいま」

「何故一人なんだ」

「先に行つてゐる様に言われたんだ」

「ふうん」

来宮はいつもの様に、厭味たらしい顔で橘谷を見た。橘谷は、何故かそれを見て安心した。

「榮戸だな」

「うん」

「あいつが一番曲者かもなあ」
「だな」

橘谷はやはり、来宮と下町の言っている意味がいまいち分かつていない。視線をずらすと、顔色の悪い幹野がいた。物凄い顔で橘谷を見ている。

「橘谷少年。裏切つ……たな……」

「なんか死にそうなふり為るのやめて下さいますか」

「五月蠅いよ！ 引き止めといて置いてったの誰だよ！」

「僕です」

「確信犯かよ！」

「五月蠅い若人」

来宮が幹野を見もせず言った。来宮の中で、教育実習生よりもさらに格下げがあつた様だ。同じ年代として括られたみたいである。

幹野はさらにげっそりした様に、テーブルに突つ伏した。橘谷は乾いた笑いを漏らし、先程座つていた席に座つた。

「女子高生。やっぱ此処禁煙だよな」

「当たり前だ。校内全面禁煙」

「ち……。なんだって禁煙なんだよ」

「おい警察がいうな。好奇心旺盛な未成年の喫煙防止の一環だろう」
「俺が決めたんじゃないやねエ」

「当然だろう。一介の所轄刑事に学校の方針まで決められたら困る」
「うるっせエ」

下町と来宮は先程より明るくなっている。幹野だけが沈んだ

とはいえ原因はわかりきっている　空気を背負っていた。

「失礼します」

がらり、と開いた扉から榮戸が覗いた。下町は立ち上がってその席を榮戸に勧めた。榮戸は素直にその席に着いた。

「何か？　話してない事は有りませんが」

「嘔吐き」

来宮が一言言った。その声は、いつもの声より幾分低い声だった。榮戸はごくり、と喉を鳴らした。来宮のもつ雰囲気には、それほど力がある。下町は橘谷達が座るテーブルの隣りのテーブルに寄り掛かる様に座っていた。

「如何です？　下級生に尋問される気分は」

「如何もしない」

榮戸は纏わりつく湿気を振り切る様に顔を横に振った。

「別に、貴方が犯人とは言っていない」

「俺達には“犯人”が解っている」

「だ、誰が未夏を！」

榮戸は大きな声を上げた。来宮はふん、と鼻で笑った。

「何が可笑しい」

榮戸は来宮をきつと無意識ににらんだ。それに動じることなく、来宮が続けた。

「可哀想にねエ。原因を作ったのは君だよ」

「俺が？」

橘谷は驚いた。原因を作ったのは君。まるで、心の隅にあった考えを、肯定するかのような　。

「君、小波未夏に言っただろう？」

榮戸はハツとした。

「『好きでいるのはやめてくれ』と」

「それは。未夏が」

榮戸はがくりと肩を落とした。橘谷は耳を塞ぎなくなる衝動に駆られる。

「それは」

「それは？　なんだ」

「未夏が、大事だったから」

「じゃあ」

来宮は、すつ、と目を細めた。

「何故そんな事を言った。何故そんな突き放す様な事を言った」

来宮の声は落ち着いていた。幹野ですら、真剣な顔で来宮の話に耳を傾けていた。

「解らない。そんな事。解る訳ないじゃないか……」

「そんな中途半端な考えで、彼女を傷付けたのか」

榮戸は魂が抜かれた様に、黙った。背中からは、いつもの土気が感じられない。橘谷は思わず目を背けた。榮戸の右手には、葛川のつけた傷が赤赤と残っている。

「それが、どれだけ大変な事が、解っているのか？」

来宮の声は、執拗に榮戸を責める。下町は何も言わなかった。

暗い廊下では、入る事ができず吉田が壁に寄り掛かり中の話を聞いていた。服に桜の花弁が張り付いていた。

橘谷は背けた目を、そうつと瞑った。暗闇が広がる。薄らと蛍光燈の明りが透ける。

「最低だな」

「そんな、そんな事言っただけ」

「そうだ。この件に関して、一番悪いのは小波未夏だ」

来宮ははつきりとした口調で言った。

「しかし、責任はお前達にある。榮戸、多村、天堤、幹野。全員にだ」

「……………」

幹野も榮戸も何も言わなかった。幹野は自分に対する苛立ちと後悔で、ぎり、と歯を食いしばった。

「それぞれに責がある。それぞれに非がある。それぞれに罪がある。全員が浅はかで浅慮だ。それは、罪なんだよ」

「たとえ俺らが罰せられない罪だとしてもな」

下町がドスの聞いた声で言った。

橘谷はがたり、音を立てて立ち上がった。来宮がちりり、ところらを見て哀しそうな顔をした。その顔に視線を合わせる事無く、「天堤さんを捜してる」と、橘谷は部屋を出ていった。幹野はもう、何も言はない。

「酷だ。こんなもの。お前も、誰もが。酷過ぎるんだよ」
「全くだ」

それきり、部屋はしんと静まり返った。

部屋を出た橘谷は、廊下にいた吉田と目が合い、今更恥ずかしくなった。

「よ、吉田さん」

「あ、どうも……」

御互い何だか気まずくて、苦笑した。

「どちらへ……？」

「天堤さんを捜しに」

「あの……御一緒にいいですか……」

「ええ……」

確かに今更中にはいるのは気まずい同士である。

二人は取り敢えず、この儘上に上がり、一年の教室に行くことにした。

「なんか、凄い事になってますよね」

「僕も、着いて行けなくて。光喜さんも、ずっと解ってたみたいだし」

「こっちもですよ。というか未だに何がなんだか解ってません……。吉田さんも、解ってるんですよね……」

橘谷は一人だけ置き去りにされた様で詰まらなかった。

「多分……。でも、僕の口からは何とも」

はは、と哀しげに笑った。橘谷はA棟に繋がる渡り廊下から外を見た。其処彼処に桜の花弁が張り付いている。もうすでに、美しい

と言う形容詞は似合わない。叩き付けられた花卉は、桜色から茶色に変色してしまっている。

「この学校、本当桜多いんですね」

「そうですね。春は、目が痛くなるほど桜色で溢れてます」

「でも綺麗な学校です」

吉田は窓の外の葉桜を見ながら言った。もう数本の八重桜に幾つか花がついているだけである。桜陸には、シンボルツリーである大きな枝垂桜の周りにある数種類の花以外、桜しか花がない。

「春以外は詰まらないですよ。偶に、咲く季節を間違える奴もいますけど」

時折、夏や秋に花を開く桜がある。橘谷は中学の時分、学校見学の際に一本だけ狂い咲く桜をみた。

「桜はよくあるそうですよ」

「確かに。よく聞きますよね」

そんな話をしている内に、一年の教室についた。しかし人はおらず、B棟に戻り、屋上に上がる事にした。

「まだ立ち入り禁止なんですけど…」

「ああ」

橘谷はあのナイフの突き立てられた光景を思い出し、思わず目を瞑った。

「大丈夫ですか」

「大丈夫です」

そう言って屋上へと続く階段を昇り始めた。

中履きで歩く度、湿気を帯びた廊下が、きゅ、きゅ、と音を出す。

吉田のスリッパも同じ様なリズムで足音を鳴らす。

「しかし、広い学校ですねエ。道に迷う学校なんて初めてです」

（迷ったんだ…）

橘谷はそう思ったが、口には出さない。それに吉田が気付き、「ま、迷ってませんよ」と弁解した。

屋上に続く扉は閉められ、黄色のテープが貼ってある。扉を開く

と、天堤がいた。こちらに気付き、振り向くと、消え入る様な声で言った。

「ごめんなさい」

第九章 影は光を超えず

風が吹き抜けた。鋭い音と共に。それはまるで空が口笛を吹く様だと、この状況とはあまりに不釣り合いな事を、橘谷は考えた。その音が合図のように、風が強く吹き荒んだ。

天堤は正に濡れ鼠であった。この雨の中、傘も差さずに学校の屋上に居れば当然である。

「天堤さん！」

橘谷は風に呷られ侵入して来た雨粒に目をしかめながら、天堤に向かい叫んだ。

「私」

天堤の唇が動く。しかし橘谷は上手く聞き取る事が出来ない。天堤は白い菊の花束を抱えたまま、こちらに来る事はない。双方共に、声が届いていない。

「傘を持って来れば良かったな……」

そう吉田は言ったものの、流石に取りに戻る訳にはいかない。昏い空の下に一步踏み出した。別に、嵐ではない。風が異様なまでに吹き荒ぶだけ。遠くは雲の切れ間から光が差している。足下の桜色の水溜まりを避けながら、天堤の立っている所、小波が死んでいた場所に足を進める。

「吉田さん！ 滑らないでくださいよ、花卉が凄いですから！」

橘谷の注意は微かに吉田の耳に届いた。スリッパの足は、容赦無く濡れる。この場合裸足の方が危なくないのでは、など思い付きもしない。

「ほら、こっちだ」

吉田は天堤の元に辿り着くと、濡れた上着を頭に掛けて倒れそうになるのを支えながら来た道を戻る。

「大丈夫ですか？ 二人とも……」

見事に濡れ鼠が二匹である。吉田は濡れた靴下を脱ぎながら、頷

いた。

「平気。でも、うわあ、びしょびしょだよ……」

靴下を持つ手だけを外に突き出して絞った。水が滴る。

「天堤さんは？」

「……ごめんなさい」

吉田の上着を頭から被ったまま座り込んだ、天堤は小さな声で言った。橘谷は自分の乾いたブレザーを吉田の上着の替わりに羽織らせて、濡れた吉田の上着を払った。流石にスーツを絞る訳にはいかない。

「ああ、ありがとうございます」

吉田は靴下を丸めながら苦笑してお礼を言った。

「如何しようかなあ。乾かないかなあ」

「家庭科室に、乾燥室が有りますけど」

「借りてこようかな……」

「天堤さん、ジャージもってる？」

「はい……」

体操服が有る。かたかたと肩を震わせる天堤を立たせ、橘谷は化学実験室へ、吉田は職員室へと向かった。

もう一度、口笛の様な風が吹いた途端、風は止み、外の雨足は穏やかになった。

廊下には点々と水滴が落ちていた。天堤のワンピースの裾から、歩く度滴り落ちるのだ。

化学実験室に着くと、榮戸は窓に向かい座っていた。怖いくらいの沈黙である。天堤を先程まで榮戸が座っていた席に座らせる。

「吉田に会わなかったか」

「えーと……、訳有って家庭科室の乾燥室に……。ずぶ濡れなので」

「……すみません」

天堤は震える身体を懸命に立て直そうとする。

「着替え持って来るから。何処にある？」

「教室のロッカーに」

橘谷は小さく頷くと、また教室を後にした。

「忙しい奴だな」

「吉田の阿呆は何してんだ」

「あの私の所為なんです……」

「まあ、いい」

来宮は深く追及はしなかった。

「あの、来宮さん」

「何だ？」

天堤はがさがさと、ポケットから二つに折った封筒を取り出した。微かに濡れている。その封筒を、来宮に差し出した。

「これは？」

「未夏から預かったものです」

天堤は、涙を流した。

「橘谷先輩には、申し訳無い事をしました」

俯いて、ただ淡々と口を開く。誰も止めも急かしもしない。

「初日に橘谷先輩に相談した内容は、ほとんど嘘です。虚実の入り交じった、作り話です」

天堤は拳を握り締めた。来宮は、悲しげに天堤をみた。

「『ケイちゃん』の話を聞かされていたんです。私は、如何しても未夏を止めなければ為らないのに。術が……無いんです。いえ、無かった」

雲間から光が差した。校舎の影が、化学実験室に落ちた。

「だから。人に話して」

「話を大きくしようとしたんだな」

「はい。そうすれば、思い留まってくれるかと……」

来宮はテーブルの上ののった封筒を手にした。

「喜べよ光喜刑事。証拠だ」

「喜べるわけないだろうが」

「同感だ」

テープで封をされた封筒を、手で千切り開ける。ぴりぴりと紙を

裂く音だけが室内に聞こえた。ひらりと一枚の紙を取り出した。

「ああ、矢張りな」

「あー……、畜生。家宅搜索令状取らなかったのは正解だったな……」

来宮と下町は頭を抱えた。榮戸も幹野も、話を聞かされているらしい。

橘谷は丁度、保健室を回って、階段を下り切った所だった。引き戸の把っ手に手を掛け、開ける。

「タオルも貰って……」

そういいながら、がら……と開けた時。部屋に太陽の光が差した。明るくなった部屋に響いたのは、悲哀に満ちた来宮の、それでも凜とした来宮の声だった。

「小波未夏は、自殺だ」

橘谷の思考が、一瞬ストップした。

「俺は先に署に戻るからよ。吉田は此处で待つ様に言っとけ」
「解った」

下町は来宮から封筒と紙を受け取ると、橘谷の立ち尽くす場所にやってくる。そこは出入り口だからだ。

「気を落とすなよ」

擦れ違い様に一言残すと、下町は足早に其処を去って行った。

「橘谷先輩」

天堤が振り返った。

「あ、あの。ジャージ、とタオル」

「橘谷君」

「如何すればいいのかな。此处では着替えられないよね」

「橘谷ッ！」

「なんで証明するんだ。自殺だなんて。証明されたら、否定できないだろう……」

橘谷は眉を顰め、頭をゆるゆると振った。橘谷は解っていたのだ。幹野から話を聞いた時。あの時既に解っていた。

「事実だ」

「事実でも。それは余りにも」

沢山の人が犠牲になりすぎた。

「ごめんなさい」

「いいんだ。別に。でも、納得出来ないんだ」

「橘谷君」

「なんだ」

橘谷はタオルとジャージの入った指定の袋を抱えたまま出入り口から動かない。

「君は私に頼ったの」

来宮は、こんな場所に似合わない笑みを浮かべて言った。

「私は頼られた。だから、この件を消化しただけ」

来宮はどこか悲しそうだった。

「解るか？ 私だってね」

来宮は俯き言った。

「結構辛いんだ」

その声は、来宮の声とは思えない、弱々しい声だった。

たった八日。この長くて短い八日間の事件が、幕を下ろした瞬間である。

来宮のぼつりと呟いた言葉が、室内に響いた。

「ああ、みんな 醜いね」

それしか言わなかった。

*

「光喜さん、置いてきましたね……」

「まあそう気を落とすな」

「というか、僕だけ展開に着いていけないんですが」

「イケてないからじゃないか？」

「変な冗句止めてください」

乾燥室でスーツをすっかり乾かして、戻ってきた吉田は、あまりの室内の静けさに唸ってしまった。それに反する様に、夕方の赤い陽が室内を満たしている。下町が一旦署に帰った事を伝えると、吉田は「なんだあ」と気が抜けた声を上げた。

事の真相は、『小波未夏の自殺』であった。吉田の言葉は、ある意味正解だったのだ。

殺意さえあれば……

小波未夏は自分に揺るぎない殺意を抱いていたのだ。それは、彼女が自分自身を貫くのに充分過ぎた。天堤の持っていた封筒、遺書には一言だけ。

『さよなら』

この言葉は、関係者の心に深く突き刺さった。

吉田はネクタイを絞めながら、溜息を吐いた。

「どうした吉田君」

「警察、辞めようかなあってね」

「辞めちゃうんですか？」

橘谷もだいぶ落ち着きを取り戻した。蒼白だった顔に赤みが戻っている。

「いや、きつと辞めないよ。ただね、トラウマになりそう」

「解る気がするなア……」

橘谷と吉田は同時に溜息を吐いた。

その後、天堤は母が迎えに来て帰った。榮戸は新聞部に戻り、残ってる仕事を片付けてから帰るという。幹野はいつもの能天気な笑いを残して職員室へと引込んだ。化学実験室には、来宮、橘谷、吉田だけが残った。

「しかし、なんか複雑ですね」

「ああ。小波嬢は一度に沢山を背負わされたんだ」

友人との表面上の確執、大好きな幼馴染みに突き放され。

「来宮さん。多村先生は結局」

「ああ、それはね。榮戸が多村に『未夏と一時期離れたい』と相談

してる時、小波嬢が聞いてしまったんだよ」

「なんで知ってるの……」

「失礼だとは思ったが、小波嬢の日記を一月分ほど読ませて貰ったんだ」

「それプライバシーの侵害……」

「何か言ったか？」

吉田がぼそりと呟いた言葉を、来宮は笑顔で聞こえない振りをした。

「日記なんて、今時珍しいですねエ」

「一二行くらいだったかな」

来宮は小波の部屋でそんなものを見てたのか、と橘谷は思った。

あの時の、小波の母が階下で嘔び泣く声が耳から離れない。

「お母さん、きつともっと泣くだろうね」

「子が死んで泣かない親は居ない」

「そうだね」

此处に居る全員が、自分の家族を思い浮かべた。自分が死んだ時、家族は涙を流してくれるだろうか。

「しかし、親より先に死ぬのは親不孝にも程がある」

来宮が言い放った言葉に、静まり返る室内はもう赤い陽も翳っていた。

「どうしよう、僕いきなり悲しくなってきたよ！」

「僕もですよ、どうしましよう！」

「男二人がそろってなアに、戯けた事を」

出所の解らない悲しみに、戸惑い橘谷は取り敢えず電気を点けた。新聞部同様、二三回点滅して明かりが点る。

「あ、なんか落ち着いたかも……」

「明るいつていいですね……」

「馬鹿ばかりだなこの学校は……」

「僕は生徒じゃないですよ！」

「生徒でも通るだろう？」

「あ、酷いッ」

吉田の声が、なんだか可笑しくて橘谷は笑ってしまった。久々に笑う気がする。それにつられる様に、来宮がくすくすと笑った。吉田は自分が笑いの中心になつてるのが少し気に食わなかったが、取り敢えず一緒に笑っておいた。

「なんだア？ お前ら気でも狂ったか？」

「あ、光喜さん……」

「下の名前で呼ぶなッつの」

「だッ」

下町はワイシャツの胸ポケットに入っていたライターを、思いきり吉田に投げると、見事にこめかみに命中した。

「今更だろう？ 光喜刑事」

くつくつと喉を鳴らして笑う。全員が何故か晴れやかな顔をしていた。

「終わって見ちゃうと呆気ねエな」

「悲しい結果ですけど……、解ったらすっきりしました」

「もう皆充分悲しんだよ」

来宮が翳る夕陽を見て、微笑んだ。
遠くで、鴉が啼いた。

*

それから一週間後。

「来宮さん……」

化学実験室。橘谷が机に体を投げ出して嘆いていた。

「なんだ騒々しい」

「明日テストだよ？ すっかり忘れてた……」

「ふん。自業自得だ」

事件の所為で、すっかり忘却していたのだ。

「いやあ、橘谷少年」

「げ」

「来宮さん酷いなあ、げ、ってさあ」

「幹野先生、完全に復活しましたね……」

「ん？ ー、そうでもないかなー。まだ夢に見るからね。未夏ちゃん顔とか、あの遺体、とかね……」

へらりと笑った顔は、まだ少し陰りが伺えた。結局、多村は桜陸の教師を辞めた。実質的に責任はないにしても、自分に多少なりとも小波の死に責があるなら、此処には居られないということだ。天堤は転校もせず、相変わらず桜陸に通っている。前よりも、積極的に人と関わる様になった。

「しかし。橘谷少年、テストだよー。大丈夫かなー？」

「一タム力つきますね貴方は」

「橘谷少年」

幹野はふと真面目な顔になる。

「な、なんですか……？」

「益々、来宮さんに似て来たね？ ……うわッ」

「このスケコマシ。ふざけるなら帰れ」

思い切り幹野に黒板消しがヒットした。

「あ、ちょ、酷い……げほッ」

チョークの白い粉が辺りに舞った。

「スケコマシって……来宮さん……」

「そうだよなア？ 華和君」

「あら、御気付きでしたか……」

扉の影に、天堤の姿があった。橘谷はあの日以来会っていない。

（あれ、この二人って会わせちゃ拙いんじゃない……）

「御機嫌よう、幹野先生」

「ど、どうも……」

「来宮さん化げんしょ……げほッ」

「五月蠅いぞ橘谷君」

顔の前で思い切り黒板消しをはたかれる。思い切り吸い込んでし

まい、大きく咳き込む。

「俺はこれで失礼しようかなア……」

「華和君、一発ひっぱたいて置け。よし、橘谷、押さえている」

「え？」

「え、ちょ」

「橘谷君はやく」

黒板消しをちらつかせ、橘谷を促した。

「ごめんなさい！」

橘谷は後輩と教師を秤にかけて、後輩を選んだ。

「あ、また裏切ったな橘谷い！」

「もとから仲間じゃないです」

橘谷に腕を掴まれ逃げるに逃げられない。

「幹野先生」

天堤がにつこり笑った。朔也から幹野に呼称が変わっている。

「往生際が悪いですわよ」

「いだッ」

天堤はにこやかな顔を崩す事なく幹野に鮮やかな平手打ちをお見舞いした。

「あら御免遊ばせ、力の加減が巧く出来ませんの」

橘谷と幹野は、来宮がもう一人増えた事を確信した。

「橘谷君、部活だろ」

「ああ。そうだった」

新聞の部長、榮戸は相変わらずである。更に硬派になったが、無愛想なのは元からだ。

「橘谷君、帰りにまたよってくれ」

「何？」

「それはお楽しみだ」

くつくつと笑った顔は橘谷と初めて会った時から健在である。因みに、天堤は古典同好会を退会、危険物研究同好会に入会した。
(もの好きもいるものだ)

橘谷がそう考えた事は伝わってしまうのか、来宮はじろりと視線を超越す。

「じゃあ、部活行こうかな……」

橘谷はそくさと部屋を出る。幹野も逃げる様に、また職員室に引っ込んだ。くすくすと二人の少女が笑いあう声は、平和以外の何物でもなかった。

僕達は日常に戻ったのだ。非日常の暗い隊道を抜けて。

*

「何の用なのさ」

「明後日の土曜、パーティーが有るんだ」

「創設祭なんですよ」

につこりと笑った天堤が付け足した。

「創設？」

「なに、ちよっとしたホームパーティーさ」

「はー……」

来宮は一通の封筒を差し出した。橘谷は怖々と受け取る。エンボスの柄が綺麗だった。

「なにこれ」

「招待状だ。忘れるなよ」

「場所は何処？」

「……そうだね。駅前でタクシーつかまえて、東京の都民四季公園に向かわせれば良いだろう。そこで待たせておくから」

（待たせておく……？ 何を？）

橘谷は依然釈然とせず、封筒を見詰めていた。天堤はにつこりと笑った顔を崩さない。

「正装でこいよ。ジーンズとかTシャツとか怒るぞ」

「わ、解ったよ……」

橘谷は鞆に封筒をしまった。そしてテーブルに頼杖を付き、溜息

を吐いた。

「しかし、天堤さんはなんでまた危研に？」

「私、来宮さんを尊敬してますわ！」

（あちゃー……）

橘谷は目を輝かせる御嬢様を奇特な物を見る様な目で見た。

「あちゃー……とか思ってるだろ」

「何で解るの！　じゃなくて、思ってない！」

「ふうん」

くすくすと笑う天堤に、橘谷は安心した。あんな形で友人を無くしてしまったのだ。きっと来宮の計らいだろう。来宮は口先だけではない。橘谷はこの二週間ちよつとど理解した。

「二人とも……明日テスト、平気なの？」

「私を誰だと思っている」

「来宮さん、素敵です！　あ、私は端から諦めてますー」

（ほら、来宮信者が……）

この三年間で、彼女は何人の信者を作るのだろうか。

それなりに楽しみだ。

そう橘谷は思った。

「何笑ってる」

「別に」

何時の間にか、八重桜も花を散らしていた。桜陸は爽やかな新緑に包まれた。

第十章 最後にひとつ

橘谷のテストは、散々だった。それでも比較的上位に食い込めたつもりである。とはいえ、決して解らない問題ではないはずが、やはり勉強をしていないと解らない。

そして、例のパーティーの日。桜陸駅前でタクシーを捕まえた。今日の橘谷は、来宮の指定通り正装だった。とは言っても、大学の寮に入って居る兄に上下を借りた物だ。焦茶の細身のズボンに、白いワイシャツ、黒いジャケット。取り敢えずポケットには桜陸のワインレッドのネクタイが入っている。ノータイでは不味かった時の備えだ。鞆は何を持って良いか解らず、招待状と携帯、財布を小さめの斜め掛けに入れて持って来た。

「お客さん、どちらまで？」

「都民四季公園まで」

「はいよ」

小気味良いエンジン音を唸らせて、タクシーは進んだ。窓からの景色は、新緑から住宅地に、そのうちに都会の街並みが広がった。四季公園は街中に有る、そこそこ広い公園だ。

「お兄さん、お金高いけどちゃんとあるよね？」

「え、あ、はい。…それなりに」

タクシーの運転手はメーターをちらちらみながらブレーキを踏んだ。

「着いたよ」

「有り難う御座います」

「えーと、一万二千…」

橘谷は思わず唾を飲んだ。桁が違う、自分の認識と。払えない訳ではない、しかし、帰る事が出来なくなるのだ。すると、こつこつとタクシーの助手席の窓を叩く人がいた。三十代くらいの男性だ。運転手は面倒臭そうに窓を開けた。

「橘谷様ですか」

「へ、あ、はい」

「運転手さん、お代はこれで」

差し出されたのはチケット。そう、タクシーチケット。

「ほら、とつととおりな」

橘谷はよく解らないうちに運転手に促され外に出た。

窓を叩いた男性は、黒いスーツを綺麗に着込んでいる。橘谷の出来合い社交人とはレベルが違う。

「御嬢様からお話は伺って居ります。こちらへ」

（天堤さんか？）

怖々と着いて行けば、其処には黒塗りの外車。

「御乗り下さい」

またまた橘谷は怖々と乗り込んだ。余りの豪華な御出迎えに、少しばかりの恐怖すら感じた。すつ、と車は地下の駐車場へ吸い込まれた。橘谷はいよいよ怖くなってきた。

「どうぞ」

「どうも……」

扉を開けられ、恐る恐る外に出る。地下駐車場には、ホテルのメインエントランスの様な入口があった。

「えーと、此処は？」

「門松グランドホテルで御座います」

「は？」

男性は一般庶民の橘谷に向かって、凄まじく丁寧な応対だった。それが更に、橘谷の臆病な心を揺さぶった。

「あ、橘谷先輩！」

ホテルのエントランスから天堤が手を振っていた。天堤は、桜色のシフォンドレスだ。ボブの髪は、少しだけ巻いてある。

「では私はこれで」

男性は一礼すると、落ち着いた歩みで天堤に近寄り一礼すると、建物の中に消えた。

「先輩、中はいつたら如何ですか」

「うん」

天堤の顔を見て少し安心した。ロビーの様なスペース、ホテルなのだからロビーなのだろうか。そのスペースには、沢山のよく見た顔がそろっていた。テレビで、見た顔。

「天堤さん、何事？」

「だから。創設祭です」

「え」

（ちよつと豪華なホームパーティ程度じゃないの？）

橘谷はぐりと辺りを見渡した。まるで庶民だ。庶民なのだが。

「お客様、招待状を拝見致します」

ベルボーイが寄ってきて橘谷に一礼した。橘谷は自分まで恐縮してしまい、名刺の様に招待状を差し出した。

「確かに。それではごゆっくり御寛ぎ下さい」

帽子を取り、一礼しまた被ると背を向けて行ってしまった。

「な、何の創設祭！」

「門松コンツェルンのですわ」

「え、ええ？」

門松コンツェルンは、泣く子が更に泣き出す大企業。金融業を基盤に、食品関係、工業関係、娯楽関係、手広く触手を伸ばす。創設者は当時、天皇を表す「御上」と呼ばれ、経済界を支配した。

「これ、教科書：」

に乗っているのだ。

「…来宮さんは？」

「準備中です」

「あのさ、もしかして」

いいかけた所で、放送が掛かった。

『大変長らくお待たせ致しました。門松コンツェルン、創立百二十年記念創設祭を開始させていただきます。皆様、お足許にお気を付けて、会場にお越し下さいませ』

（なんだこの放送は）

橘谷は呆つと考えながら、天堤に引かれ会場入りした。

会場は絢爛豪華なシャンデリアに赤い天鵝絨の絨毯。丸テーブルには色とりどりの料理が並べられていた。会場の前の方では、シェフたちが鮪の解体ショーの準備をしていた。

「皆様、本日はお忙しい中御集まり戴き、有り難う御座います」

スピーカーから、先ほどの男性の声が聞こえた。橘谷は静かな雰囲気、緊張した。

「まず、現総裁来宮……」

（ああやつぱり）

「橘谷先輩、もしかしくなくても、来宮さんは門松コンツェルンの」

橘谷は掌で天堤の言葉を遮った。

「羽衣松から挨拶を、と思いましたが少し移動に時間が掛かっており、会場に到着されてません。変わりに総裁令嬢、来宮市松より御挨拶させて戴きます」

会場から拍手が起きた。橘谷は一人うなだれていた。

壇上に建った来宮は、いつも下ろしていた髪を上げて、白地に紫紺と黒の蝶々が舞う着物姿だった。紫紺の帯が映えている。

「来宮さん、美しいわ!」

「いや、そこ? もしかして知らなかったの僕だけ?」

「僕ですよ……」

橘谷はふと後ろから掛けられた声に振り返った。其処には、数名の制服警官と下町と吉田。

「警備頼まれちゃいまして」

「面倒臭エな……」

ピー、とマイクの電源が入った音がする。思わず顔を向ける。

来宮の立つ壇上だけが、光りに溢れていた。

「皆様、この様な高い席から誠に失礼では御座いますが、門松コンツェルンを代表いたしまして、御挨拶を申し上げます。本日は、お忙しい中、私どものパーティーに御出席戴きまして誠に有難う御座

います。また、日頃は弊社の製品、活動等に、温かいご支援を戴きまして厚く御礼を申し上げます。お蔭様で、弊社の業績はこの所、鰻登りと迄は行きませんが、大変好調でありまして、前年比10%の売り上げ増を達成しております。これは、一重にお得意さまのご協力、ご支援の賜物と感謝いたしております。好調とは申しまして、も、現在弊社の複数の製品は、複数の会社と競合しております、少しでも油断すれば、たちまち業績悪化を招きかねません。したがって、この好調を維持するために、門松コンツェルン全社一丸となつて、鋭意努力しております。今後とも、何卒、ご愛顧ご支援くださいますよう、お願いする次第でございます。また、弊社製品、活動内容、新規プロジェクトについて、ご要望やクレームなどが少しでも御座いましたら、後程で結構ですから、忌憚のないご意見をお寄せください。謙虚に受けとめさせていただきます、少しでも、ご要望にそえるよう努力してまいる所存でございます。本日は、門松フーズの製品プレゼンテーションの一環で、この様にお飲み物、食べ物、存分に用意させていただきました。どうぞ、ごゆっくりとお召し上がりになり、御寛ぎ下さいますよう、お願い申し上げます。私の様な若輩もののお話を長々と聞いて戴き、誠に有り難う御座いました。では、失礼致します」

礼をすると、会場から一気に拍手が起こった。橘谷はもう色んな事が如何でもよくなった。

「それにしてもさ、天堤さん」

「なにか？」

「君、はっちゃけ過ぎやしないかい……」

「はっちゃけたものではありませんわ」

来宮の挨拶の後、男性の声で会食が始まった。橘谷はここぞとばかりに、普段食べられない様な物を食べていた。

（庶民だなあ……僕）

「これが素なんです」

「は？」

「だから、嫌いな方は沢山いらしたし、元々ミーハーなんですわ」
「はあ……」

「来宮さんみたいに、度胸が無かっただけですのよ……」
泡が出ては消える、金色のジンジャエールをコクリと飲んで笑った。その笑い方は、事件の際に見た笑みと同じだった。

「私、祖父母や両親に押さえ付けられてきましたから」
そう付け加え、新しい彼女の明るい笑みを零した。

「未夏の事はショックでしたけど、来宮さんが良くして下さい。やっぱり来宮さんは……」

ごくごく、ジンジャエールを飲み干して天堤は言った。

「素敵です」

「あ、あはは……」

ふと会場内を見渡すと、やはりテレビで見る顔が多い。政治家も数人混じっている。門松コンツェルン経営会社製製品のコマーシャル出演をしている俳優やアイドルもちらほら見受けられる。

「凄いなあ」

「凄いだろ」

「ぎゃあッ！」

「変な声を上げるな。目立つぞ」

「来宮さん……」

呆つとしてたところ、後ろから来宮に話しかけられあられもない声を上げる。

「来宮さんさ、隠してたでしょ」

「聞かれなかったからな」

「いや聞かないよ普通……」

（スケールが違うよ）

橘谷は持った皿に載せた鶏のオーブン焼の様なものを口に入れた。全て料理は美味しい。

「会長令嬢って事だよ……？ 総裁令嬢？」

「総裁令嬢。会長は各会社にいるさ。実質上は独立企業扱いだから

な」

「しかし、あの馬鹿親父夕飯の買い物は要らんと云ったのに」
舌打ちして着物の襟を正した。

「夕飯……？」

「何かと作りがるんだ。自分で。時々兄とな、共謀してる」

来宮は兄があると何時か言っていた。

「“K”を作ったのは親父だ」

あの珈琲の店。あれまで来宮の持ち物であつたということだ。厳密には父のだが。

「そうなんだ……」

「時々、仕事抜け出して店番してるよ」

「ええ……」

橘谷は少し困惑した。天下の門松コンツェルン総裁が、あんな駅前の小さな喫茶店に出入りしてるなんて。

「私の学校が近い駅前に出すつもりだったらしくてな……学校が決まっててすぐにいつの間にかできていた」

乾いた笑いしか出てこず、橘谷は誤魔化すように別の話題を振った。

「来宮さん、ご家族とかは？」

「面倒くさいな……。まあいい。あの司会やってた男と一緒にいるのが母」

来宮と同じ、黒髪が美しい人だ。橘谷達は遠目でよく確認できない。

「あつちのむさ苦しい政治家と話してるのが祖父。はじの椅子に座っている藤の着物の人が祖母」

どちらも年を感じさせない空気を持っていた。

「華和君の両親も来ているぞ」

「ええ。あそこに」

天堤が指した方向には、一際目立つ男女がいた。髪の色は父譲りであるらしい。天堤はそのまま、「また後で」と小走りに両親の元へ向かって行った。

「華和君、本当色々吹っ切れたな…」

「そうさせたの君だろ」

「何か言ったか？」

「いえ」

「ふうん。あ、あの警備担当は何処だ」

「あそこで警備もせずに料理を貪ってるよ」

「ああ、ケータリングをもう一度頼まなくてはいけないじゃないか…」

来宮はぶつぶつと文句を言った。

「葛西！」

来宮が大きな声で名前を呼ぶと、先程の男性が楚々とした動作でやって来た。

「橘谷君、車の世話になったろう。『私』の秘書兼執事だ」

「葛西と申します」

（秘書兼執事って兼ねてないような……）

来宮は兄の下で既に仕事を回されているという事だった。

「先程は名も名乗らずに失礼しました」

「い、いえ、こちらこそ有り難う御座いました……」

「葛西ー、あのテーブルの料理補充と警備位置の確認と調整をやつといてくれ。私は雷を捜してくる」

来宮は肩が凝るのかぐるぐると肩を回した。確かに着物が重そうだ。

「橘谷君も行こう、兄を捜しに行く」

「はあ……」

「ま、ロビーで一服してるだけだろうがな」

橘谷には、兄の想像はまるでつかなかった。

*

ロビーは打って変わって静かだった。応接セットが五つもある広

い空間だ。

「ここ地下だよな」

「会員用エントランスだよ。ああ、やはり居たか」

応接セツトの一つから、煙草の煙が上がっていた。

「雷」

「あれー、なんでいるの」

兄の声は妹と同じ、心地よい音程ではあったが、妹と違い低い声だった。見た目は黒髪しか似てない。

「雷、例の橘谷君だ」

「ふうん、例の橘谷君か」

「例の橘谷です……」

よく解らず中途半端に乗ってみる。雷、と呼ばれる兄は煙草を灰皿に押しつけると立ち上がった。下町程ではないが、長身痩躯である。

「父さんは」

「スーパ―」

来宮の兄は聞かなかった事にするように、ニコリと笑って橘谷を向いた。

「……。橘谷君、初めまして、来宮市松の兄の来宮雷雨です」

「雷、パーティに戻れ。お前目当ても多いんだぞ」

「いやあ、困るね。俺は特定の条件を満たした人にしか惹かれないんだけど」

（来宮さんの兄弟だ、間違いなく……）

来宮雷雨は橘谷にひらりと手を振ると会場に入った。

「まあ座れ」

「うん」

橘谷は来宮の向かいに座った。

「橘谷君、今回は本当大変だったな」

「なんか、他人事だね……」

「他人事さ。渦中に巻き込まれたのは君一人。それこそ私は付属品」

帯の所為で、背凭れには背はつけず、姿勢を正して座って居た。
この上なく大変そうだ。

「君はまさにスケープゴート」

「酷いなあ」

「事実だ」

くつくつと笑った。

「来宮さあん。こんな所に居らしたんですか。飲み物どうぞ」

天堤が三人分のジンジャエールのグラスを持ってやってきた。

「華和君……ジンジャエールで酔ってないよな」

「酔ってませんわよ」

失礼しちゃう、と来宮の隣り、少し離れて座った。

「丁度良い。君達二人、夏休みは暇か」

「ええ、予定は学校の登校日だけですから」

「僕もだ……」

高校生が夏休み暇だというのは些か問題な気がするが、残念ながら二人とも事実だ。

「まだ先だがなア。来宮家の別荘に招待しようと思うんだ。軽井沢、長野だ」

「よろしいんですか？」

「……………」

（僕、男一人……？）

橘谷はジンジャエールを見つめてみた。

「雷が居るさ」

「お兄さんね……」

「そうそう。雷雨さん、下町さんや吉田さんと、あっちでおば様方に囲われてましたわよう。お若い方はあの方達くらいでしょう？」

皆さん御年を召したばかり方ばかりですから」

（はつきり言うなあ……）

先程から確かに下町の声が聞こえている。吉田は縮こまり声はあげないだろうし、雷雨はあらしい方を心得てるのだ。葛西は会場に

居ない。

「馬鹿馬鹿しい。で、橘谷君来るのか来ないのか」

「い、行きます。行きますとも」

来宮の黒みを帯びた笑顔に半ば押し切られる形でOKした。

くすくすと笑い合う、二人の少女の声がロビーに聞こえた。

桜はもう一輪も残ってない。ここ最近の雨で、花弁も流されてしまった。

哀しい事件は終わった。人形のような少女が解きほぐし。

春は終わった。抗えない、時の流れに流されて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4849c/>

サクラ散り

2010年10月8日15時55分発行